

英語教育の"今"を知る。明日からの授業が変わる。

平成から令和へ

日本の英語教育はどうあるべきか

大学入試改革ニュース

大学入学共通テストに向けて

今日から使える！クラスルーム・イングリッシュ

滋賀県 大津市立晴嵐小学校

全英連三重大会に向けて

サミット開催の地 三重から発信！

教員の自主研修

全英連新潟大会から広がった自主研修の輪

名古屋外国語大学 太田 光春 教授

文部科学省 直山 木綿子 視学官

山田 誠志 教科調査官

富高 雅代 教科調査官

英語情報

新創刊に向けて

公益財団法人 日本英語検定協会では、日本の英語教育推進を目的として、さまざまな情報提供を通して英語教育に関わる全ての先生方へのサポートをさせていただいてまいりました。このことは、公益財団法人としての大きなミッションであり、今後ともこの方針は変わることなく続けていくこととしております。

そのうえで、社会の変化とともに英語教育に求められる内容が大きく変化してきている実態を踏まえ、より現場の先生方のニーズに合わせた情報提供の重要性を考え、このたび『英語情報』を新創刊することにいたしました。

新創刊に際して、『英語情報』は先生方ご自身の授業改善につながる情報をご提供していく誌面であることを目指しています。そこで、編集部では読者の皆さまへのアンケート等によって、より多くの先生方の「ニーズ」「問題点」「困り感」を受け止めさせていただき、その解決方法について、誌面を通じて全国の先生方とともに考え、議論し、アイデアを出し合い、共有していくことを考えております（もちろん、スーパーティーチャーの素晴らしい実践の背景には、その先生の不断努力や工夫、そして研究があることは事実ですし、その成果に触れることは大変学びが多いと考えてはおりますので、今後とも折に触れてご紹介してまいります）。

つきましては、全国の先生方から『英語情報』に、これまで以上に積極的にご意見をお寄せいただくことで、**先生方のための『英語情報』**として育てていただきますよう、お願い申し上げます。

児童生徒たちが生きていくこれからの社会は、刻々と発信される膨大な量の情報を常にアップデートし続け、新しい技術を習得しようと常に学び続ける意欲や、多様な価値観を持つ人々と、答えの見えない問題の解決に向けて粘り強く議論し続けるコミュニケーション能力が求められる社会です。このような社会で生きる彼らに、英語教育を通して、「学び続ける喜び」「コミュニケーションを通して他者と分かり合える喜び」を教えていただくことで、全ての児童生徒一人一人が自己実現を図り、生き生きと人生を送ることができるようご支援をお願いします。キーワードは**Every Child Matters!（どの子ども大切）**です。

新しい『英語情報』の提供に向けて編集部一同、より一層尽力してまいりますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

2019年7月
『英語情報』編集部

CONTENTS

大学入試改革ニュース

02 大学入学共通テストに向けて

特集

06 平成から令和へ 日本の英語教育はどうあるべきか 教育は全ての子供たちの 学びの可能性を信じることから始まる

名古屋外国語大学 太田 光春 教授



11 新学習指導要領で目指す英語教育とは

文部科学省 直山 木綿子 視学官

文部科学省 山田 誠志 教科調査官

文部科学省 富高 雅代 教科調査官



連載

16 今日から使える! クラスルーム・イングリッシュ

第1回 滋賀県 大津市立晴嵐小学校 平山 美穂 先生

特集

18 全英連三重大会に向けて

第69回全英連三重大会実行委員会

大会実行委員長 服部 守賀 先生

大会実行副委員長 今田 禎浩 先生

大会事務局長 川合 康之 先生



22 授業実演者インタビュー

三重大学教育学部附属小学校 岡井 崇 先生

三重県 津市立芸濃中学校 庄山 大樹 先生

三重県立津高等学校 伊藤 毅 先生



連載

24 教員の自主研修 全英連新潟大会から広がった自主研修の輪

第1回 新潟県編

プロジェクトSリーダー 荒木 美恵子 先生

プロジェクトOリーダー 高橋 有香 先生

プロジェクトEリーダー 長谷川 誠 先生

新潟県高等学校教育研究会英語部長 萩野 俊哉 先生

新潟経営大学 阿部 雅也 准教授



News & Topics

29 公益財団法人 日本英語検定協会からのお知らせ

『英語情報』は年2回発行に。現在、リニューアル準備中！

全国の小・中・高等学校の先生方、
各都道府県教育委員会の皆さまにご愛読いただいている『英語情報』。
2019年度より年2回発行となり、現在、リニューアル創刊号を準備中です。

もっと、英語教育の「今」を伝える情報誌へ。
もっと、英語教育に関わる先生方に役立つ情報誌へ。

全国の先生方が取り組む授業実践例や、全国で活動する先生方の自主研修活動、
小学校の授業で使えるクラスルーム・イングリッシュ表現集に加え、
安河内哲也先生（実用英語推進機構代表理事）や池田周先生（愛知県立大学）の連載なども企画中！
新しくなる『英語情報』をどうぞ楽しみに。

※リニューアル創刊号の発行時期については、英検協会ウェブサイトにてお知らせします。

大学入学共通テストに向けて 「大学入試英語成績提供システム」や「英検」新方式とは？

2020年度から実施される「大学入学共通テスト（共通テスト）」について、大学入試センターより問題作成方針が発表され、「大学入試英語成績提供システム」の利用方法などが明らかになってきました。2019年6月現在で公表されている情報とともに、公益財団法人 日本英語検定協会（英検協会）が実施する「実用英語技能検定（英検®）」の新方式の概要についてもお知らせします。

※英検®は公益財団法人 日本英語検定協会の登録商標です。



「大学入学共通テスト」の英語試験はどうなる？

2019年6月、文部科学省より公表された「大学入学共通テスト実施大綱」により、初年度の共通テストは2021年1月16～17日に実施されます。それに伴い、大学入試センターから発表された2021年度の「大学入学共通テスト問題作成方針」より、「問題作成の基本的な考え方」と「出題教科・科目の問題作成の方針」の「英語」について、一部抜粋してご紹介します。

【問題作成の基本的な考え方】

目的：高等学校の段階における基礎的な学習の達成の程度を判定し、大学教育を受けるために必要な能力について把握すること

- センター試験の良問の蓄積を受け継ぎつつ、高等学校教育を通じて大学教育の入口段階までにどのような力を身に付けていることを求めるのかをより明確にしながら問題を作成する。
- 高等学校学習指導要領において育成することを目指す資質・能力を踏まえ、知識の理解の質を問う問題や、思考力、判断力、表現力を発揮して解くことが求められる問題を重視する。
- 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善のメッセージ性も考慮し、授業において生徒が学習する場面や、社会生活や日常生活の中から課題を発見し解決方法を構想する場面、資料やデータ等を元に考察する場面など、学習の過程を意識した問題の場面設定を重視する。

【出題教科・科目の問題作成の方針：英語より】

- 高等学校学習指導要領を踏まえて、外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの知識を、実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できるかを評価する。発音、アクセント、語句整序などを単独で問う問題は作成しない。
- ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）を参考に、各CEFRレベルにふさわしいテキスト作成と設問設定を行うことで、A1からB1レベルに相当する問題を作成。実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面、状況の設定を重視する。
- 「リーディング」については、様々なテキストから概要や要点を把握する力や必要とする情報を読み取る力等を問う。
- 「リスニング」については、生徒の身近な暮らしや社会での暮らしに関わる内容について、概要や要点を把握する力や必要とする情報を聞き取る力等を問う。多様な話者による現代の標準的な英語を使用し、当面は1回読みと2回読みの両方の問題を含む構成で実施。
- 4技能のバランスのよい育成が求められていることを踏まえ、「リーディング」と「リスニング」の配点を均等とする。

【英語の出題方法】

出題範囲	「コミュニケーション英語Ⅰ」に加え、「コミュニケーション英語Ⅱ」及び「英語表現Ⅰ」
出題方法と試験時間・配点	「リーディング（80分・100点）」と「リスニング（60分・100点）」いずれもマーク式にて解答



共通テストの問題作成方針など詳細は、こちらよりご確認ください。

<https://www.dnc.ac.jp/news/20190607-03.html>

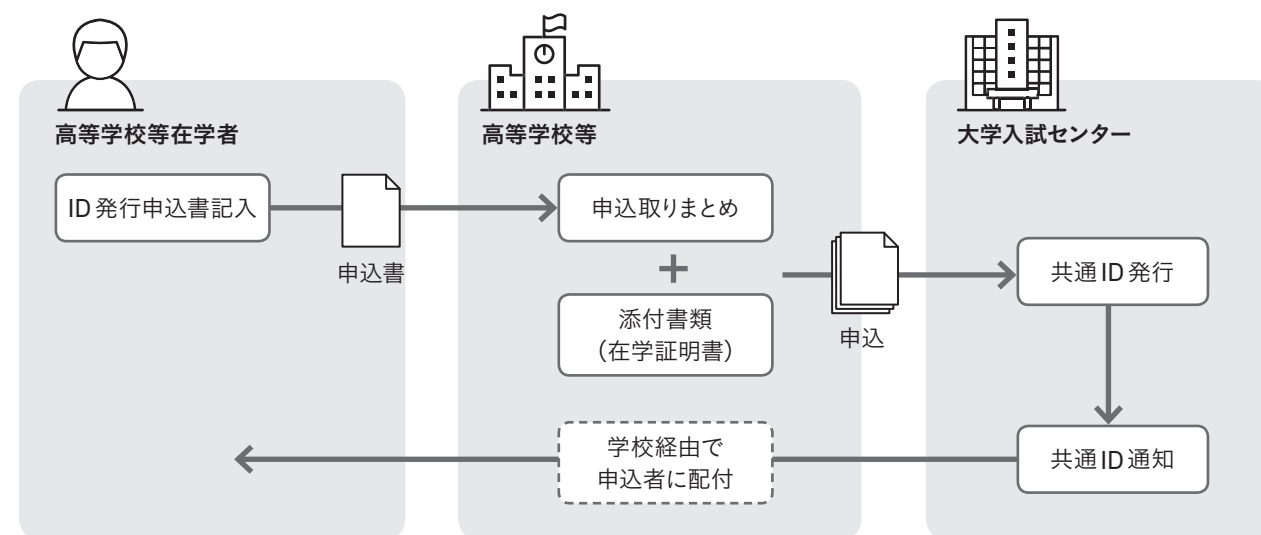
「大学入試英語成績提供システム」はどのように利用するのか？

共通テストの実施にあたり、英語4技能を適切に評価するため、共通テストの枠組みにおいて民間の資格・検定試験が活用されます。大学入学者選抜では、受験者の成績情報を大学入試センターが一元的に集約・管理し、請求のあった受験者の成績を大学に提供する「大学入試英語成績提供システム（成績提供システム）」を利用します。

◆成績提供システムの利用には「共通ID」が必須

- ・受験者の共通ID（各資格・検定試験共通で個人を特定するためのコード）の申込・取得が必須。
- ・共通ID申込受付期間は、高校2年生の11月。高等学校等を通じて、大学入試センターへ在学証明書を添えて申し込む。
- ・共通IDの発行は12～1月頃。学校経由で受験者へ配付。

※共通IDの有効期間は2年間とし、翌年度までは同じ共通IDを利用可能。

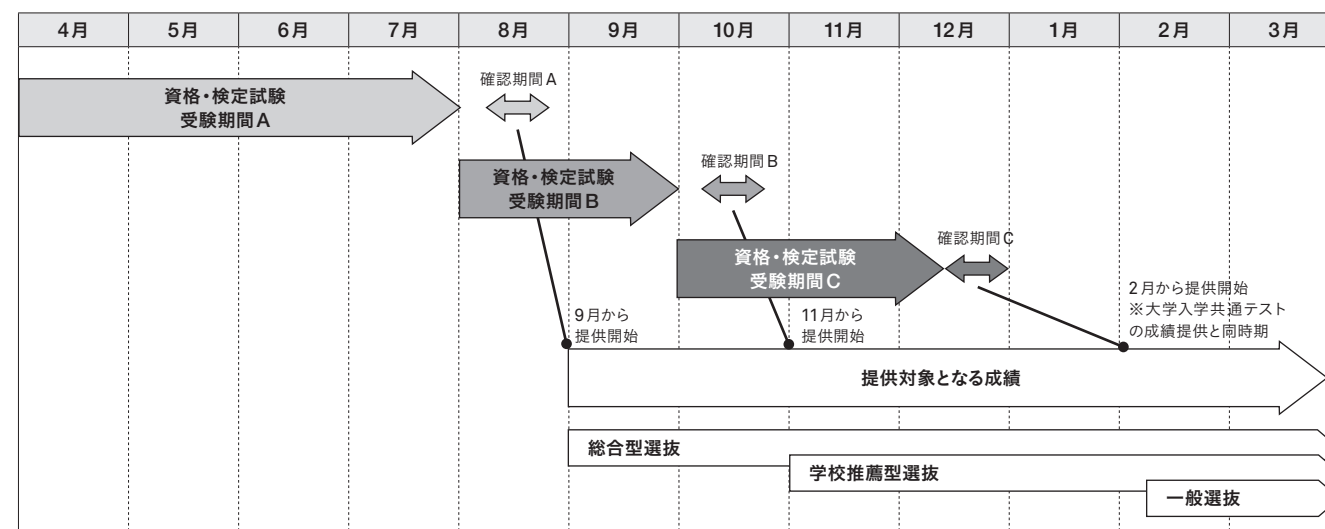


※大学入試センター資料より

◆大学への成績提供時期

大学への成績提供開始時期は、受験期間を入試選抜方式に応じて3回（9月以降、11月以降、2月以降）に分けて設定。

〔2020年度の例〕総合型選抜：2020年9月～／学校推薦型選抜：2020年11月～／一般選抜：2021年2月～ 提供開始



※大学入試センター資料より

2020年度の「英検」新方式の実施概要のお知らせ

英検協会は「大学入試英語成績提供システム」に採用された英検の新方式について、試験実施の公平性及び厳正性を考慮し、2020年度の実施概要について、次のように決定しました。

【2020年度の「英検」新方式 実施概要】

- 「英検 CBT」と「英検 2020 1 day S-CBT」の CBT 方式を中心に実施
- 高校3年生の受験者のうち、合理的配慮が必要な障がい等のある方を対象として「英検 2020 2 days S-Interview」を実施

		英検新方式		
		CBT方式		
		 後援：文部科学省	 後援：文部科学省	
対象受験者		制限なし	高校3年生 (既卒生含む)	高校3年生(既卒生含む)のうち、 障がい等のある受験者への合理的 配慮で、CBT方式での措置以外の 対応を要する方
実施方式	RL	CBT	PBT / CBT ^{※1}	PBT
	W	CBT	PBT	PBT
	S	吹き込み	吹き込み	対面式
日程・実施回数		常時実施 ^{※2} 4-12月に「成績提供システム」に提出できる受験回数は2回まで		6-7月、10-11月 年間2回 ^{※3}
受験日数		1日	1日	2日
会場		テストセンター		公開会場(約400カ所)
会場数		47都道府県に配置 ^{※2} 各都道府県に1カ所以上		47都道府県に配置
対象級 (CEFR段階)		準1級～3級の4グレード A1～B2 ^{※4}	準1級～3級の4グレード A1～B2	1級～3級の5グレード A1～C1
検定料 (税込)	1級	——	——	16,500円
	準1級	9,800円	9,800円	9,800円
	2級	7,500円	7,500円	7,500円
	準2級	6,900円	6,900円	6,900円
	3級	5,800円	5,800円	5,800円
障がい等のある 受験者への配慮		あり ^{※5}	あり ^{※5}	あり ^{※5}

※1: 2019年度は例外措置対応としてRLはCBT方式としましたが、2020年度は申請時の通り、PBT方式で実施いたします。

※2: 「英検 CBT」「英検 2020 1 day S-CBT」のいずれか、もしくは両方かは未定です。

※3: 「英検 2020 2 days S-Interview」につきましては、インフルエンザや感染症の発症等、やむを得ない事情で当該実施日に受験できなかった受験者は、センター試験同様、特定の場所(未定)で、別日程で再試験を実施する予定です。

※4: 「英検 CBT」の準1級の実施は2020年度については未定です。

※5: CBT方式と「英検 2020 2 days S-Interview」のどちらの形式での受験となるかは、お申し込み時にご提出いただく診断書を参考に有識者と協議し、ご本人と相談のうえ決定いたします。

●「英検 CBT」と「英検 2020 1 day S-CBT」

対象: 「英検 CBT」は制限なし、「英検 2020 1 day S-CBT」は高校3年生(既卒生含む)

会場と日程: 全国47都道府県[※]に、より高いセキュリティレベルを保持する「テストセンター」を設置。試験の常時実施を目指します。

※「英検 CBT」は順次拡大中。「英検 2020 1 day S-CBT」は各都道府県に1カ所以上配置予定。

※公平で厳正な試験を実施するため、「英検 2020 1 day S-CBT」は高等学校会場を使用いたしません。

●「英検 2020 2 days S-Interview」

対象: 高校3年生の受験者のうち、CBT方式での対応が難しい、吃音者を含む、点字やテロップ、筆談等の合理的配慮が必要な障がい等のある方。

会場と日程: 従来型の英検と同じ実施日で、約400の全国の公開会場の中の特別措置に適した会場で受験いただけます。

※CBT方式と「英検 2020 2 days S-Interview」のどちらの形式での受験となるかは、お申し込み時にご提出いただく診断書を参考に有識者と協議し、ご本人と相談のうえ決定いたします。

●「英検 2020 1 day S-CBT」のお申し込みについて

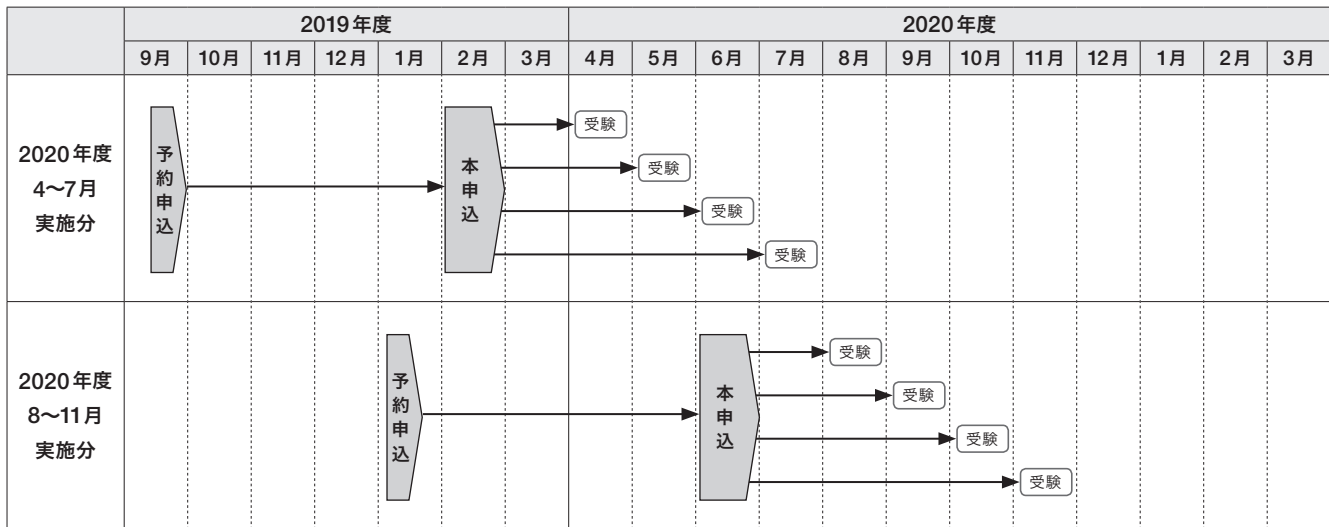
「英検 2020 1 day S-CBT」は、「予約申込」と「本申込」の2段階の申し込みが必要です。

日程は、2020年度4～7月実施分、8～11月実施分の2期に分け、それぞれ1回ずつ受験できます。

予約申込時に登録したエリア(ブロック)の中から、本申込時に試験会場・試験日程の詳細を選択いただけます。

詳細につきましては、英検ウェブサイトにてご案内いたします。

「英検 2020 1 day S-CBT」2020年度高校3年生のお申し込みスケジュール



なお、2019年度の高校2年生のうち文部科学省が定める「例外措置[※]」の対象者は、「英検 CBT」(各検定回で1回ずつ)または「英検 2020 1 day S-CBT」(2019年11月～2020年3月で1回)にお申し込みができます。

※例外措置とは

○高校2年時にCEFRのB2以上(英検における準1級合格レベル)を取得している方で、家庭が経済的に困難、または離島・へき地に居住・通学している方は、大学入学共通テストにおいてその成績を活用することができます。

○病気などの理由でやむを得ず受験年度(高校3年時)に受験ができなかった場合、前年度(高校2年時)の際に受験した大学入試英語成績提供システム参加試験の結果を活用することができます。

※文部科学省 平成30年8月28日「大学入学共通テストの枠組みで実施する民間の英語資格・検定試験について」より

2020年度の「英検」新方式の受験要綱など、今後の決定事項については、英検ウェブサイトにて随時お知らせいたしますのでご確認ください。

平成から 令和へ

日本の英語教育はどうあるべきか

名古屋外国語大学 太田 光春 教授に聞く

名古屋外国語大学 外国語学部 英語教育学科長
太田 光春 教授

元 文部科学省初等中等教育局視学官。
1979年から2001年まで愛知県の公立高等学校で教諭。2001年より愛知県総合教育センター研究部教科研究室研究指導主事兼愛知県教育委員会高等学校教育課指導主事。2004年より国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官、国際教育課外国語教育推進室教科調査官。2009年より文部科学省初等中等教育局視学官。2016年より名古屋外国語大学外国語学部英語教育学科教授。2017年より現職。

教育は全ての子供たちの 学びの可能性を信じることから始まる

「平成」の時代における英語教育は、知識量や正確さが求められた「昭和」の教育から、主体的に学びに向かう態度の育成を重視する「令和」の教育へとシフトしていくための“過渡期”であったと、名古屋外国語大学の太田光春教授は振り返る。

文部科学省初等中等教育局の教科調査官として平成20・21年の学習指導要領改訂に携わり、その後は視学官として「教育は、全ての子供たちの学びの可能性を信じるのが前提」という信念のもと、英語教育の改善に尽力してきた太田教授から、新たな時代の教育と教員に求められる姿勢についてお話を伺った。

「昭和」の教育 … 「いかに効率よく教えるか（Teaching）」が求められた時代

「平成」の教育 … 「いかに学ばせるか（Learning & Learning Outcomes）」が求められた時代

「令和」の教育 … 「学びの成果の見える化（Making Learning Visible）」が求められる時代

社会の変化に伴い、教育にパラダイムシフトが起きた

「平成」の時代の英語教育は、「昭和」から「令和」へシフトしていく過渡期にあったと言えます。まず、「昭和」の時代を振り返ると、教員には効率よく、生徒に知識を与える指導が求められていました。問われるのは語彙や文法の知識量や正確さであり、生徒には、文脈とは無関係に英語を暗記することが求められたのです。

しかし、言葉は何のためにあるのでしょうか。私たちは言葉を使って、意味と気持ちをやり取りしています。コミュニケーションの手段として、情報や考え、気持ちを伝え合っているのです。言葉を的確に理解し、適切に伝えるためには、相手を大切に思う気持ちや信じる気持ちが必要となります。相手の立場に立つて物事を考える視点が必要となります。だからこそ、現行の学習指導要領においては、「思考力・判断力・表現力等の育成」と「言語活動の充実」がうたわれ、授業では子供たちが自分の考えや気持ちを伝え合う言語活動を充実させることが

大切だとされたのです。教育課程の基準である学習指導要領のうえでは、小・中・高等学校の外国語教育は、「コミュニケーション能力の育成」という目標でつながれました。このような外国語教育のパラダイムシフトが起きたのが、「平成」の時代でした。

何のために英語を習得するのか

英語は世界の共通言語です。コミュニケーションの手段としての英語を習得することができます。それは、人生の可能性を広げることを意味します。英語を媒介にして、自分の人生を豊かにしたり、切り拓いたりすることができます。英語力と志があれば、日本の枠を超えて世界に貢献することができます。ただし、学校教育だけでは到底、多くの人が満足できるレベルの英語力を習得することはできません。だからこそ英語科教員には、学校外でも自ら英語を求める人、生涯にわたり英語を使い続ける意欲とノウハウを身

に付けた人、つまり、「自律的な学習者」を育成することが求められるのです。そのためには、子供たちが学習の主体となり、成功体験を通して学習者としての自信を高め、英語を身に付けることに対する情熱を持たせる、生徒と生徒、教員と生徒のやり取りを軸にして展開する授業への転換が必要となりました。

「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない」。平成19年の一部改正で、上記の内容が「学校教育法」に第30条第2項として追記されました。これは、法的に、学校の使命が「生涯にわたり学習する基盤づくり」であると示された点においても、身に付けさせる学力の要素が3つ示された点においても、画期的なできごとでした。

英語科教員に求められること

人生100年時代を迎え、子供たちは学校を卒業してから、何十年も生きていきます。学校で得た知識や技能はいずれ陳腐化します。知識基盤社会をたくましく生き抜くためには、学校で身に付けた知識や技能を常にアップデート、アップグレードしていく必要があります。本当の学びは、学校を卒業してから始まるとも言えます。

平成29・30年に改訂された新学習指導要領では、「言語活動の充実」の精神は受け継がれ、「主体的・対話的で深い学び」が一層重視されました。なぜ、知識・技能を身に付けるのか。それは、課題を解決するためである。その際には、思考力・判断力・表現力が必要であり、何よりも主体的に学びに向かう態度が大切である。このことが確認されたのが「平成」の時代の教育でした。これを英語に当てはめると、基礎的な知識である語彙や文法は大切であるが、これらはコミュニケーションを円滑にするという課題とコミュニケーション・ブレイクダウンを乗り越えるという課題を解決するために活用するものである。その際に、批判的思考力や論理的思考力などに代表される、さまざまな思考力や判

断力、表現力が重要な役割を果たす、ということになります。

膨大な知識を持っていることが優秀とされた時代から、知識を活用できることが大切とされる時代への転換、学校は学ぶところという認識から、学校は生涯にわたり学び続ける準備をするところ、社会に出てからも学び続けることが大切という認識への転換。それが「平成」の時代の教育に求められたことでした。

そして「令和」の時代を迎え、いよいよ来年度から、新学習指導要領に基づいた指導と評価が実施されていきます。英語科教員がこれから考えていくべきことは、主体的に学び（英語）に向かう態度をどのように養っていくのか、ということです。教育課程のなかに英語が必修科目として位置付けられている意味を改めてかみしめ、全ての子供たちの学びの可能性を信じて、生涯にわたり英語と付き合っていこうとする人を育てることが、私たち教員の役割であることを再認識しなければならないと思います。

評価は何のためにするのか

子供たちは誰もが学びの可能性を持っています。学びの遅い・速い、能力の

高い・低いはあるとしても、学べない人はいません。全ての子供たちの可能性を信じる、それが教育の前提なのです。だから、「どの子供も大切であり、どの子供も絶対に英語を身に付けることができる」と信じて、授業に臨んでほしいと思います。もし、学びの遅い子供がいたら、その子供に寄り添い、粘り強く導いていく。それが教員の役割です。

教員の仕事は、利根的な学力の状態を捉えて子供たちを等級別に分類し、レッテルを貼ることではないことは言うまでもありません。誰と比較するかで評価が変わる相対評価ではなく、その子供一人一人がどのように学び、何ができるようになったのか、目標が達成できたのか等について、結果だけでなく、その過程も含めてしっかりと捉える絶対評価の方が、子供の健全で持続的な学びのためには有効です。何かを身に付けたいから学ぶ人は、人に評価されたいから学ぶ、よく見られたいから学ぶという人より、努力の点でも、粘り強さの点でも、動機の点でも強いと思います。子供たちに前へ進もうとする勇気や自信を与えるために、評価は存在すべきです。子供たちの学びに対して、学びに向かう態度に対して、

自分の下す評価がどのような影響を与えているのか。そこまで思いをはせて、日々の指導と評価の営みを考えることができれば、「令和」の時代の教育を充実させることはできないでしょう。

インパクトを常に考え、アテンションを大切にして授業を展開すること

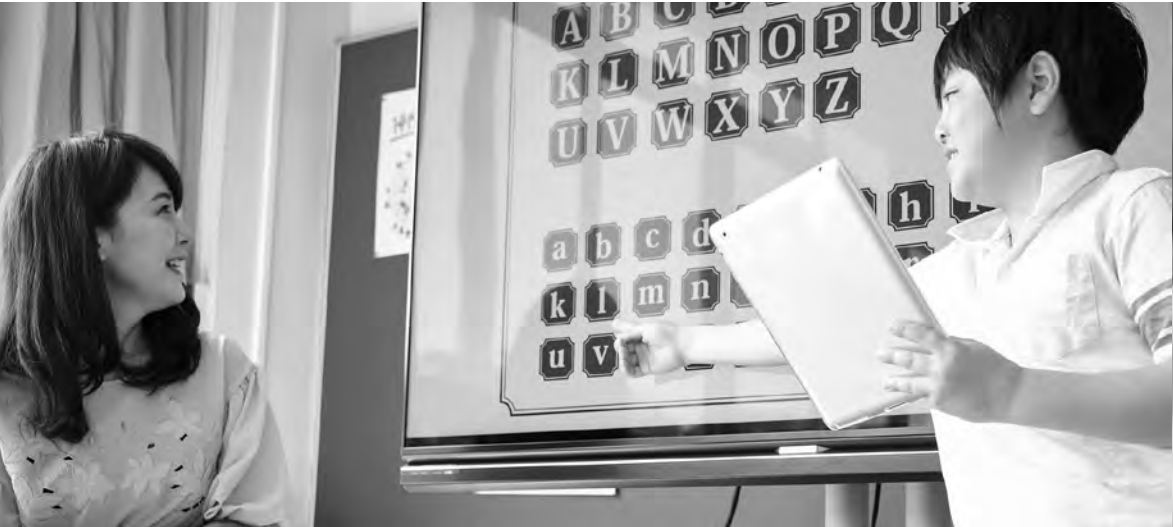
子供たちの学びの可能性を信じ、主体的に学ぼうとする態度を養うためには、動機付けが重要です。私は現在、大学教員として、英語教育学科の学生たちを教えています。「学生一人一人が学びに向かう態度に、どれだけインパクトを与えることができるか」を常に意識して、毎回の授業に臨んでいます。教室には、英語に自信のある学生も、自信のない学生もいます。入学直後には、「大学では多くの授業が英語で行われることは予想していたけれど、自分の聞く力や話す力が、ほかの学生と比べてあまりにも貧弱だ」とショックを受けて、涙を流しながら研究室に相談に来る学生もいます。このような学生が、授業を通して学習者としての自信と意欲を高め、人として成長していく姿を間近に見ていると、幸せな気持ちでいっぱいになります。しかし、その



一方で、高等学校の先生方には、大学に合格させることだけでなく、目の前の子供たちが大学に入学してからも余分な劣等感を感じることなく、自信を持って英語を学び続けることができるよう、知識と技能を活用させる授業づくりを期待しないではいられません。「高校を卒業させたら自分の役割は終わり」「大学に合格できさえすればよい」ではありません。授業を通して、どれだけの子供たちが「英語が好き」「英語をもっと学びたい」と思ったでしょうか。そのようなインパクトを残すことを常に意識し、学習者としての自信と学ぶ意欲を高める授業をしていただきたいと思います。

サブリミナルな効果は別にして、アテ

ンションが払われないものは人の記憶に残りません。授業では聞かせたいこと、学ばせたいことに対して、常に子供たちのアテンションを向けるよう意識することが極めて重要です。子供たちは関心を持ちさえすれば、おのずから前のめりになって学ぶようになります。教科書の英文は、その内容を子供たちの持つ背景知識や経験と関連付けて扱い、そのなかにある情報や考え方、言語材料を用いて、伝える必要のあることや伝えたいことを伝え合う活動をさせるようにするとよいでしょう。子供たちに「伝えたい!」「話し合ってもっと理解を深めたい!」と思わせるような言語活動を工夫することが教員の腕の見せどころです。



学びの成果を「見える化」して学習意欲を喚起する

授業は子供たちが英語を使って活動する場であり、自信や学習意欲を高めていく場であるべきです。やり取りを通して、子供たちは「自分の考えや気持ちを相手に伝えられた」「相手の伝えたい内容を理解できた」といった成功体験を積むことができます。のびのびとやり取りをさせるためには、教室に間違いを恐れず発言できる、友達の間違いも受け入れることができる雰囲気をつくるのが大切でしょう。また、話し手は聞き手の理解が容易になるよう配慮して伝える、聞き手は話し手が話しやすくなるよう配慮して聞く。このような態度の大切さも意識的に指導する必要があります。併せて、子供たちが学んで身に付けた成果を「見える化」し、学習意欲や自信を高めることも、教員の大切な役割です。

学びの成果を「見える化」するためには、フィードバックが大切です。発言内容の良い点を指摘したり、生徒のスピーチや対話を継続的に撮影し、授業で共有して、前回よりも良くなったところや課題を話し合ったり、継続的にエッセイを書かせ、それを授業で共有して質的量的向上を確認したり、課題を話し合ったりする。そうすることで、子供たちは「できるようになった自分」に驚き、それを喜び、達成感を味わい、次なる学習への意欲を高めます。学びの「見える化」をすることで、学習者としての自信はもちろん、次の高みに向かう学習意欲を喚起することもできるのです。

また、学習意欲の喚起と自信の向上のためには、適切なゴール設定をすることも大切です。適切なゴールとは、少しチャレンジングであっても、自分の努力と教員やほかの生徒のサポートがあれば何とか達成できる目標のことです。授業ごとに適切なゴールを設定し、それらを生徒と共有するとともに、それらを達成するために効果的な言語活動を考え

ることは教員の大切な役割です。

教員もUserでありLearnerである姿勢を見せる

子供たちを自律した学習者に変えるためには、教員自身が英語使用者としてのロール・モデルと英語学習者としてのロール・モデルになる必要があります。なぜなら、この自覚と意欲は生徒に伝染するからです。どんな英語であっても、それを子供たちの学びのために本気で使っていることが伝われば、子供たちはそれを受け入れ、英語に対してポジティブな気持ちを持ち始めるでしょう。また、日常生活のなかで英字新聞やペーパーバックを読む、英語のニュースを聞くなど、常に学び続けている姿を見せれば、子供たちの英語との接し方に大きな影響を与えるでしょう。良い教師であるためには、スーパーティーチャーである必要はありません。一人の学習者として学び続ける後ろ姿を子供たちに見せることができればよいのです。

聞き手や読み手に配慮して言葉を使わせる

教職は、人の成長に関わる仕事です。生徒の成長をサポートすることで社会に貢献し、生徒の成長を自分の喜びにする仕事です。英語科教員としては、子供たちが英語をコミュニケーション（聞くこと・読むこと、他者との対話）の手段として使うことに喜びを感じ、もっと英語を身に付けたいと意欲を高めていく姿を見ると、心からうれしくなるものです。

AIがどんなに発達しようとも、自ら目標を設定したり、感情を理解して処理したりすることはできないと思います。また、できてはいけません。それは人類にとって重大な危機を意味するからです。ICTの発達は私たちの生活を本当に豊かにしてくれます。しかし、その技術が進めば進むほど、人と人とのコミュニケー

ションがより大切になってくるでしょう。コミュニケーションは、相手の気持ち、自分の気持ちを大切にしながら、意味や気持ちを伝え合うことで成立します。英語科の目標は「コミュニケーション能力の育成」であり、英語科教員にはそれを達成することが求められています。これからの時代を担う人材を育成するためには、これまで以上に、感情を持つ人間同士が相手に気遣いながら情報や意味のやり取りをする経験を豊富にさせる授業づくりが大切ではないでしょうか。互いに対する敬意があれば、相手の言葉に耳を傾けたり、相手に分かるように丁寧に伝えようとしたりするようになります。すると、自然に互いを大切にする気持ちが芽生えます。そのような子供たちが教室に増えれば、いじめの問題も起きにくくなるのではないのでしょうか。

グローバル社会の進展に伴って、ますます重要性を増した「異文化理解」の教育も、身近な人間関係のなかから始められると考えています。例えば、教室で一人一人がそれぞれの違いを認め合い、それぞれの持ち味を生かしながら協力することで、互いを高め合い、一人では成し得ないであろう目標を達成していくことが「異文化理解」のスタートラインになるのです。親和関係を基盤とし、信頼と敬意によって可能になる「間違いが受け入れられる雰囲気」が存在し、対話を軸にして展開する、教員が生徒の学びにインパクトを残すことを意識した指導と評価を提供し、学ばせるのではなく学びたい気持ちにさせる、そして英語をコミュニケーションの手段として使うことで身に付けさせる授業を実現していくこと。それこそが、「令和」の時代に求められる英語（外国語）教育だと言えるでしょう。



特集 | 平成から令和へ 日本の英語教育はどうあるべきか

新学習指導要領で目指す英語教育とは

新しい時代「令和」を迎え、今後の日本の英語教育はどのようにあるべきなのか。新学習指導要領の全面实施を控えた今、小・中・高等学校における授業づくりや指導のあり方について、文部科学省初等中等教育局の直山木綿子視学官、情報教育・外国語教育課の山田誠志教科調査官、富高雅代教科調査官にお話を伺った。（文中敬称略）



司会進行
小野島 恵次 『英語情報』編集長





小野島 「平成」から「令和」へと時代が移り変わりました。新学習指導要領のもとで、日本の英語教育はどのような方向を目指していくのか、改めてお話を伺います。まずは、先生方ご自身の教員経験も踏まえて、日頃から大切にされている思いをお聞かせください。

直山 私は京都市の中学校での英語科教員からスタートし、現在の京都市総合教育センター研究課で研究員として、京都市の小学校英語指導計画や教材を作成してきました。その後、同センター初等英語担当指導主事や京都市教育委員会学校指導課指導主事として小学校英語に携わるようになり、「外国語教育は何のためにあるのか」「言葉とは何のためにあるのか」について、小学校の先生や子供たちから初めて教わった気がします。言葉とは、「自分のことを相手に理解してもらい、相手のことを自分が理解するためにあるもの」です。中学校では、生徒に英語力を付けることが大事だと思って英語を教えていましたが、小学校の先生や子供たちと出会い、それまでの指導観を反省させられました。そして、子供たちに母語の力を付けるために外国語の力を借りる、そうして外国語の力も付ける。母語ではない

言語、外国語の習得を通して、母語をメタ認知することで、改めて言語の素晴らしさ、豊かさ、言語で意思疎通を図る大切さを感じることができると考えています。AIが発展し、翻訳機械を通して会話が成り立つ時代になりましたが、自分で言葉をひねり出してコミュニケーションを図ることの大切さ、楽しさを伝えていくことが、今、私に求められていると、改めて感じています。

山田 私は岐阜県の中学校の英語科教員として4校に勤務し、大垣市指導主事、岐阜県教育委員会の指導主事を務めました。教員在職中には、文部科学省の英語教育海外派遣研修に参加し、第二言語習得理論を学ぶ機会を得ました。加えて、実際に自分が学習者として英語を改めて学ぶ体験をしました。それらのことが、英語教員としての礎を築くことにつながっています。授業ではいかに生徒に英語を使わせる体験をさせるかということが大事であり、教員はそのことを信条として授業に臨まねばならないと痛感しました。帰国後に研修で学んだことを実践したところ、生徒の学びに対する姿勢が大きく変わり、テストの点数も伸びました。その時の経験があるからこそ、「英語は実際に使わなけ

れば身に付かない」と、実感を持って研修の場などでお伝えしたいと思っています。

富高 私は2003年から6年間カナダのオンタリオ州立ブロック大学ESLで約30カ国の学生に英語を教えてきました。その後、宮崎県で指導教諭として高等学校の英語教育に従事し、文部科学省には昨年度、専門職として入職しました。今年度から教科調査官を務めています。カナダでは第二言語習得理論に基づいて、多様な文化的背景を持つ学生たちに英語の授業をしてきました。英語をほとんど学んだことがない初級クラスの指導、母語の影響の出やすいライティングの指導、語彙の言い換えや文の例示の仕方、帰納法的な文法指導などで試行錯誤したものです。帰国してからは、宮崎県内の工業高校や総合制専門高校で教壇に立ち、中学校で英語に苦手意識を抱いた生徒たちが、どうしたら英語に対して前向きになれるかを考えて授業をしてきました。専門高校の生徒の多くは卒業後すぐに社会へ出ます。将来、英語が必要な場面に遭遇したときに、積極的に英語と向き合える生徒を育てたいと、英語科一丸となってチームで授業改善に取り組んできました。

生徒が英語を使って 考えや気持ちを伝え合う授業づくり

小野島 大学入試での外部検定試験の活用、普通科高校の改革、専門高校における英語教育のあり方など、高等学校の現状はいかがでしょうか。

富高 普通科高校では大学入試を目標とするのではなく、その先を見据えた英語教育が必要だと思います。専門高校では英語の授業が多くないなかで、いかに英語を使うことに自信を持たせ、英語学習へ意欲を持たせるかが課題となります。それには、中学校までに学んだことを言語活動で繰り返し活用させたり、専門性と絡めて英語を使う機会をできるだけ多く与えたりすることが大きな鍵となるでしょう。高校入試は随分変わってきていますが、それでも点数による評価が英語への苦手意識を持たせてしまう状況はあります。苦手意識を持つ生徒たちには、学ぶ意欲やきっかけを引き出す工夫が必要であり、中学校や高等学校でいかに英語を学ぶことへの意味を感じられる体験をさせるかが重要だと思います。卒業後、再び英語を使用する場面に遭遇することを想定し、その際には高等学校までに学んだことを生かして前向きに英語に向き合える、生涯にわたって英語の習得に取り組む態度を育てたいものです。

小野島 大学入試改革を受けて、今後は高校入試や中学校の教育にも焦点が当たることになるでしょう。東京都では都立高校入試にスピーキングテストが導入されますが、今後、他地域にどのような影響をもたらすのでしょうか。

山田 高校入試は各都道府県で改善が進んでいます。今後は、「全国学力・学習状況調査」の英語の問題も参考に、結果の分析もしっかり行っとうえて、より良い入試問題を作ろうとする方向性を持ち続けていただきたいと思います。昨年度に教科調査官となって以来、全国の中学

校を訪れ、授業を参観させていただきました。授業改善に取り組む先生方の熱意、努力には頭が下がる思いです。もちろんまだ課題はありますが、各地の先生方の実践事例を広めていくことが、私の仕事でもあると感じています。中学校は教室内での生徒の学力差があり、加えて、いわゆる「思春期」といわれる時期であるがゆえの指導の難しさもあると思います。そのなかで、「どの生徒も大切にしたい指導をいかに行うか」が大切になります。中学校では教えるべき言語材料が多く、高校入試も見据えながら、それらを理解・定着させることも求められますが、文法事項の説明から入る従来のような指導でよいとは言えません。新学習指導要領では、授業を実際のコミュニケーションの場面とし、自分の考えや気持ちを伝え合う言語活動を通して資質・能力を育成すると示されています。先日訪れた中学校の授業では、日本文化の紹介を題材として扱っており、先生は浮世

絵が西洋絵画にもたらした影響に関する教科書本文の内容に目を通させうえて、生徒に「浮世絵のような日本文化についてどう思うか」と英語で問い掛け、生徒同士で意見交換をさせていました。授業後に英語が苦手な生徒たちに「日本文化について、英語で意見を伝え合うのは難しくなかったか」と尋ねると、予想外の答えが返ってきました。生徒たちは、「難しかったが考えることは楽しい」「ほかの人の考えを知るのは楽しい」「英語で自分の考えたことを話せるのはうれしい」「ゴッホが浮世絵に影響を受けて作品を残したことが分かって面白い」などと口々に話したのです。生徒たちは、お互いの考えをやり取りしたり、英語ではどのように表現すればよいのだろうと考えたりしながら、お互いに助け合って、話し合っていました。これからの中学校の英語教育には「生徒が自ら考える喜び、自ら気付く喜びを味わう可能性のある授業づくり」が重要であると思います。



文部科学省 初等中等教育局 直山 木綿子 視学官

文部科学省 外国語教育推進室 教科調査官、国立教育政策研究所 教育課程調査官・学力調査官を併任



文部科学省 初等中等教育局
情報教育・外国語教育課 外国語教育推進室
山田 誠志 教科調査官
文部科学省 初等中等教育局 教育課程課 教科調査官、
国立教育政策研究所 教育課程調査官を併任

学校種を超えた連携の重要さが増していく

小野島 中学校は、小学校と高等学校の橋渡しの役割が大きくなり、これまで以上に、小中連携や中高連携の重要性は増すでしょう。小・中・高等学校の教員がともに授業づくりについて考え、実践し、改善を進めていく必要がありますね。
山田 小中高連携の実態には地域差があるかと思いますが、調査上は小中連携を行っている地域の割合は上がっています。各地域にある高英研や中英研に加え、最近では、小英研や小中英研といった組織も作られています。校種間の連携を成功させるためには、お互いが同じゴールを目指す英語教員として、相手の校種の先生から学ぼうとする謙虚な姿勢を持つことが大切です。

直山 小学校で外国語活動が始まった当初、小学校の先生はまさか自分が外国語の指導に携わるとは思っていなかったという方がほとんどだったと思います。私が2009年度から教科調査官として各地の研修などに伺った際には、そのような先生方に随分出会ったものです。しかし、小学校の先生方は大きな壁を乗り越えました。学級担任として全ての教科等を教えているからこそ、他教科等と関連させた内容や活動をうまく外国語教育に取り入れて、豊かな学習活動をされています。例えば、『We Can! 1』のUnit 1では、サッカーの長友佑都選手のビデオメッセージを視聴する活

動があります。映像を見せると子供たちは、彼が愛媛県出身であること、プロサッカー選手であることなどを聞き取れた言葉を基に理解します。すると先生は、“Oh, Ehime! Where is Ehime?”と問い掛け、社会科での都道府県の学習とつなげます。“Shikoku!”と答える子供たちに対して、先生は“Yes, that’s right. How many prefectures in Shikoku?”とさらに問いかけます。子供たちが“Four!”と答えたら、すかさず“Four prefectures? Tell me.”と県名を答えさせ、黒板に書き出していくのです。そうして子供たちとやり取りをしながら、社会科が得意な子が輝くような授業を展開しています。学級担任として学級の子供たちの実態を把握できているからこそ、単元の内容に応じて、算数や理科、家庭科などと連携して、得意なところ

も引き出しながら授業を上手に進めています。学習指導要領のもとで小・中・高等学校がつながっており、中学校が果たす役割はますます重要となります。小学校では、外国語活動で外国語の音声や表現に慣れ親しみながら、自分の考えや気持ちを伝え合う体験をします。外国語科では、自分の考えや気持ちを伝え合う活動をし、経験を重ねます。中学校では、さらに表現を加えて自分の考えや気持ち、事実を伝え合いながら、表現などを分析的にも学習し、文法と結び付け、新しい場面でもコミュニケーションの目的や場面、状況に応じて伝え合える力を身に付ける指導が必要になります。それだけに、今後はますます小中連携、中高連携、小中高連携の重要さは増し、他の校種ではどのような内容を教え、子供たちが何ができるようになっていくのかを把握しておくことが必要でしょう。

山田 生徒に使わせたい言語材料をどのタイミングで教えるかは、中学校の課題であり難しさであると思います。授業では生徒が英語を使う場面をできるだけ増やして、豊かなコミュニケーションが成立している状態を目指しつつも、そのやり取りのなかでいかに自然にターゲットセンテンスを生徒たちに聞かせたり読ませたり使わせたりするか、そのバランスをどのように取るかが鍵となります。それには言語使用の場面設定が重要であり、指導の工夫が求められます。中学校の先生方にはそのような授業をつくり、教えるプロとしての腕を磨いていただくとともに、そのような授業をつくることに喜びを



文部科学省 初等中等教育局
情報教育・外国語教育課 外国語教育推進室
富高 雅代 教科調査官
文部科学省 初等中等教育局 教育課程課 教科調査官、
国立教育政策研究所 教育課程調査官を併任



子供たちの未来のために、まずは一步を踏み出してほしい

感じていただけたらと思います。
小野島 最後に、全国で授業改善に取り組んでいらっしゃる先生方に向けて、応援メッセージをお願いします。
直山 小学校の先生方はこれまで大変な努力を重ねてこられました。中学校や高等学校の先生方からは「小学校の先生から学ぶことが多い」という声が聞かれるほどです。そのことにぜひ、自信を持っていただきたいものです。そして、「何のために言葉はあるのか」ということに改めて思いをはせていただきたいと思います。言葉とは人と人をつなぐためのものであり、戦うための武器ではありません。小学校の先生方は、子供たちが英語に触れる入り口に関わっているというプライドを持ってください。そして、母国語以外の言語で伝え合う楽しさを自ら感じ、その後ろ姿を子供たちに見せていってください。“Learning through Doing.” やらずして成功はありません。新学習指導要領の全面実施まで、小学

校は1年を切りました。文部科学省としては、今後も先生方をできる限り支援してまいります。
山田 教員の多忙化が問題視されるなか、中学校の先生方が、授業のほか学校行事や生徒指導、部活動などもありながら、授業改善に真摯に取り組んでいらっしゃることは尊敬に値します。その一方で、まだ言語活動主体の授業を実践されていない場合には、まずは一步を踏み出し、「言語活動を通して指導する」ことを意識した実践に取り組んでいただきたいと思います。文部科学省としても、そのような実践例をさまざまなチャンネルで紹介させていただきます。また、互いの考えや気持ちを伝え合う言語活動の充実を図るためには、まず教師自ら自分の考えや気持ちを生徒に伝えてほしいと思っています。1分でも2分でもよいので、自分のことを英語で話してみてください。そうすれば生徒も先生の言葉に耳を傾け、自分のことを英語で話そうと意

欲を見せるはずです。全ては未来ある生徒たちのために。教師、指導主事、調査官、みんなでがんばっていきましょう。
富高 大学入試も変わり、教育課程も変わります。現在進んでいる改革は、高等学校の先生方にとって“追い風”となります。現行の学習指導要領のもとで先生方が実践されてきたことに自信を持ち、これからも指導を続けていってください。新学習指導要領の目標では、小・中・高等学校のいずれも「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ」という表現が使われており、解説では「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」について「外国語によるコミュニケーションの中で、どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのかという、物事を捉える視点や考え方」であるとしています。英語の授業を通じて生徒に「見方・考え方」を身に付けさせ、生徒が英語を使って何ができるようになるのかを意識して、日々の授業に臨んでいただけたらと思います。

クラスルーム・イングリッシュ

〔連載〕

小学校の外国語活動では、どのような場面で、どのような表現を使って、やり取りをすればいいのでしょうか？ 全国の小学校や教育センターなどで活用している「クラスルーム・イングリッシュ」の表現集をご紹介します。第1回は、2018年度の全英連滋賀大会で授業実演を行った滋賀県大津市立晴嵐小学校の平山美穂先生が活用している、大津市で生まれた「マジックワード」です。

「マジックワード」ってなに？

小学校の外国語活動では、体験を通して外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむこと、積極的にコミュニケーションを図ることを意識して指導を行っています。しかし、子供たちは決まった質問に対しては返答することはできても、なかなか自分の思いを伝えられずにいる姿が多く見受けられます。

私が所属する大津市の小学校外国語活動部会（2019年度から小学校外国語活動・外国語科部会）の授業研究会に参加した際、4年生の授業で最初に「マジックワード」という表現集

を使って、自作のチャンツをみんなでリピートして活動する場面を見ました。子供たちは多様な英語表現を知り、プリントを配る際に、“Here you are.” “Thank you.”と自然と言い合っていたり、積極的に「マジックワード」を活用して自分の思っていることを伝えたりしていたのです。そこで、この発想を生かして、より活発なコミュニケーションを促す取り組みとなるよう、日頃からよく使う英語表現を新たに追加再編し、反復練習をして覚えていく活動を取り入れようと考えました。

「マジックワード」の活用方法

昨年度は、6年生の学級担任として、「マジックワード」を使った活動を実践しました。まず、自分の気持ちを伝える英語表現を集め、「ほめ言葉編」「はげまし編」「リアクション編」「マナー編」の4種類に分けて、下記の表現集を作成しました。例えば、ほめ言葉を知った子供たちのなかには、友達の良いところを探して、英語で言ってみようとする子も現れました。使う場面に応じた「マジックワード」进行分类して作成することで、子供たちも状況に応じて自分の気持ちを伝えようという意欲が出てきました。事前にALTにマジックワードを1つずつ録音してもらい、ALTが不在の時に子供たちに聞かせると、普段聞き慣れたALTの発音ということもあって

か、子供たちは安心し、リズムに乗って楽しみながら反復練習することができました。

また、モジュール時間を活用し、朝の授業前などの短い時間を使って、音声に合わせてながら子供たちと反復練習をしてみました。そして、子供たちには「間違ってもいいから、声に出してみよう」「言えるところからやってみよう」など声を掛けながら、少しずつ練習していくことを伝えました。1回に繰り返すのは数回と決め、急がずに少しずつ繰り返していきました。その結果、子供たちは飽きることもなく、日本語を見ると、英語が口から出るようになりました。

ほめ言葉編

いいね！	Good!
	Nice!
とてもいいね！	Very good!
そのとおり！	That's right!
よくできました！	Good job!
すごい！	Great!
すばらしい！	Fantastic!
	Wonderful!
	Excellent!
いい考え！	Good idea!
がんばったね！	Nice try!

はげまし編

おいしい！	Close!
もうちょっと！	Almost!
もう1回やってみて	Try again.
あきらめないで	Don't give up!
やればできるよ	You can do it.
時間をかけていいよ	Take your time.
気にしないで	Don't worry.
	Never mind.
リラックスして	Relax.
がんばれ！	Good luck!
がんばったね！	Nice try!



平山 美穂 先生

大津市立晴嵐小学校教諭。2018年度「第68回 全英連滋賀大会」小学校授業実演発表者。2019年4月より、研究派遣で大津市教育センター研究員として勤務。

子供たちの積極性を促す

「マジックワード」を実際のコミュニケーションで使えるようになるには、繰り返し口に出して言ってみたり、学んだ表現を積極的に使ってみたりすることが大切です。つぶやきや独り言も含めて、覚えた表現を使おうとしている子供たちをほめたり、クラスのなかでそのがんばりを認めたりすることで、子供たちの活動を促すようにしました。子供たちには、間違いを恐れず、恥ずかしがらずに使っていくことで、英語が話せるようになるということを、常々伝えてきました。また、「相づちを打ちながら聞いてくれると、

一生懸命聞いていることが伝わっていいね」といった子供たちの感想をクラスで共有して、聞き手の言動が話し手の発話を促すということも、同時に気付かせていきました。

このような活動を続けていくうちに、「自分もやってみよう」という子供が増え、友達の話を聞いた時に自分の思いを伝えるには、「マジックワード」にあるような英語表現で伝えられるということにも気付くことができました。

気持ちのこもったコミュニケーション活動へ

活発なやり取りをするためには、「話したい」「聞きたい」という気持ちをお互いが持って対話することが大切です。今後も、会話をする際の聞き手や話し手としての態度や心掛けなどを、子供たちに考えさせていきたいと思います。「相手の方に体を向けて話を聞くこと」や「うなずいて聞くこと」といった聞き手としての態度や、「目を見て話す」などの話し手としての態度について、その意図や相手への敬意を理解させ、実際のコミュニケーションで生かせるような指導を考えています。また、「マジックワード」を活用していくうえで、子供たちが自分から英語を話そうという気持ちが

出てきたら、「ジェスチャーを使う」「自分の言える簡単な英語表現を使う」など、さらに活発なやり取りを促すポイントも教えながら、話す楽しさを伝えていきたいと思います。子供たちが、分からない英語表現を教師やALTに尋ねたり、知っている英語で言い換えられないかを考えたりするような、語彙を増やしていく取り組みも続けていきたいと思います。今後も英語による活発なコミュニケーションを工夫し、さらに研究を続けていきます。



◀ リアクション編の音声をこちらから聞くことができます。

『英語情報ARアプリ』、通常のQRどちらでも読み取りできます。



リアクション編

本当？	Really?
私も	Me, too.
すごい！	Wow.
なるほど	I see.
あれまあ…	Oh, no!
それはいい！	That's nice.
なぜ？	Why?
いつ？	When?
それって何？	What's that?
わからない	I don't know.
終わった！	Finished!

マナー編

ちょっといいですか	Excuse me.
はじめまして	Nice to meet you.
どうぞ（やっていいよ）	Go ahead.
はい、どうぞ	Here you are.
ありがとう	Thank you.
どういたしまして	You're welcome.
いいよ / どういたしまして	Sure.
ごめんなさい	I'm sorry.
何とおっしゃいましたか？	Sorry?
もう一度お願いします	One more time, please.
質問があります。	I have a question.

SUZUKA

全英連 三重大会 に向けて

TSU

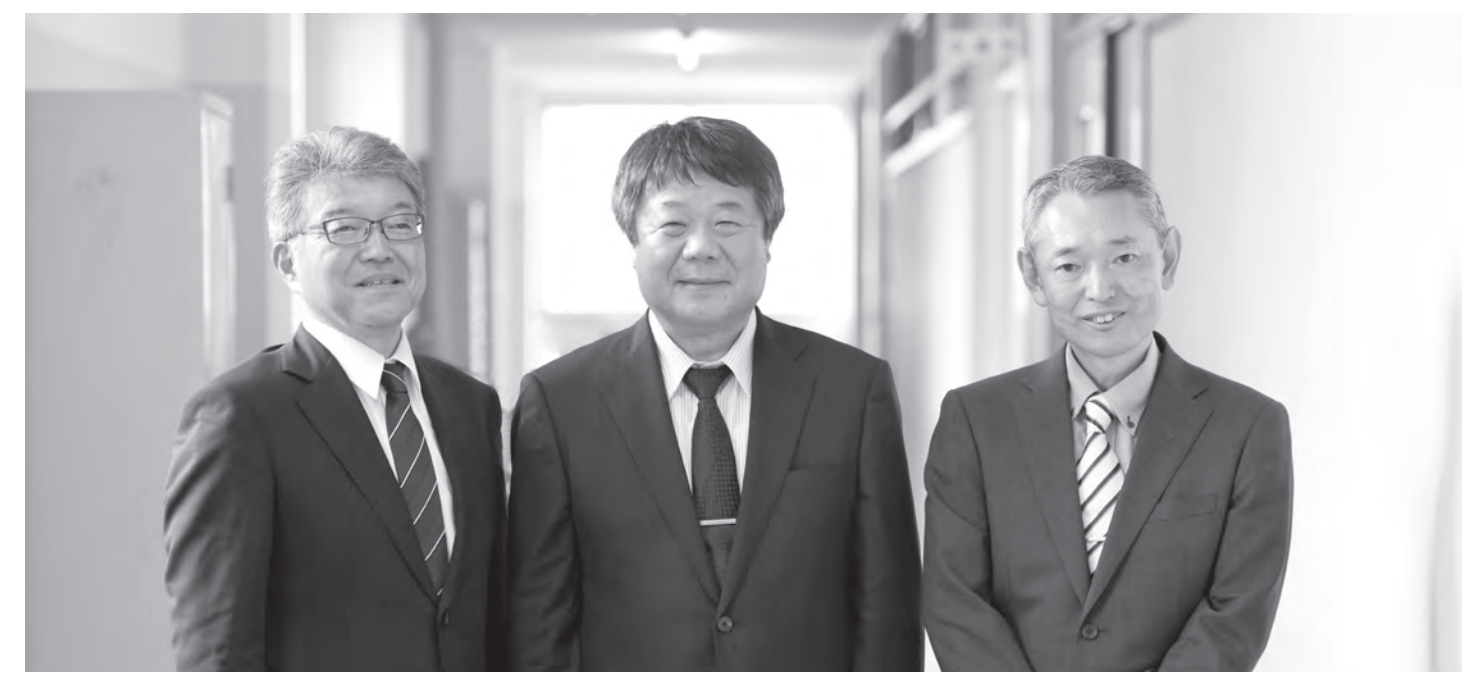
MATSUSAKA

サミット開催の地 三重から発信！ ～校種間の学びの系統性を意識した英語教育～

ISE

2019年11月8日、9日の2日間にわたり、
「第69回 全国英語教育研究大会（全英連三重大会）」が
三重県総合文化センター（三重県津市）で開催される。
三重大会のコンセプトや見どころ、
県内の小・中・高等学校における英語教育の現状などについて、
実行委員会メンバーに語り合っていたいた。
（文中敬称略、取材は2019年6月当時）

KUMANO



大会実行副委員長 今田 禎浩 先生
（津市立明合小学校長）

大会実行委員長 服部 守賀 先生
（三重県立津東高等学校長）

大会事務局長 川合 康之 先生
（三重県立津東高等学校教頭）

サミット開催の地で、令和初の全英連大会を開催

服部 全英連三重大会は「サミット開催の地 三重から発信！～校種間の学びの系統性を意識した英語教育～」をコンセプトに掲げました。新学習指導要領のもとで、2020年度から始まる小学校の英語の教科化を意識しながら、小学校から中学校、高等学校への系統性を踏まえた三重県の英語教育の方向性を示していくことを目指しています。そして、「地域で輝き、世界で活躍する児童・生徒等を育成するための英語教育の在り方を考える」ことを目的とした背景には、県の中期計画「三重県教育ビジョン～子どもたちの希望と未来のために～」があります。この教育ビジョンで示されている、グローバルな視野で考えながら、郷土への愛着と誇りを持ち、地域社会への参画と貢献、あるいはグローバル化のなか、英語力を高め、異文化理解・相互理解を通じて世界で活躍できる児童生徒を育成する「グローバル人材の育成」も柱に据えて、大会運営をしていければと考えています。

川合 ご存知のように、2016年には三重県で「第42回先進国首脳会議（G7

伊勢志摩サミット）」が開催されました。そして、サミット開催に先立ち、G7各国を代表する高校生による「ジュニア・サミット in 三重」が開催され、環境問題や人材育成など世界が抱える4つの課題について話し合いました。参加者には三重県の高校生も含まれており、生徒たちが海外の高校生と英語でコミュニケーションを深め、話し合いをしながら成長していく姿が見られました。サミットが開催された、この三重という地で得られた多くの学びを持ち帰っていただき、ジュニア・サミットと同様、小・中・高等学校、大学、そして生涯にわたって英語学習を通じた人としての成長が全国に広がることを願っています。

服部 伊勢志摩サミットが開催されたことにより、三重県の魅力も全国へ、さらには世界へと発信され、三重という地から、これからの世界の在り方や平和へのメッセージが発信されました。そこで、全英連大会開催にあたっては、「情報発信の地」と捉え、三重県で取り組んでいる校種間の学びの系統性を意識した英語教育を全国に発信していきたいと思

います。令和という新しい時代が始まりました。令和となり初めての全英連大会でもあります。この大会が、日本の英語教育改革のさらなる推進力になることを期待しています。

小・中・高等学校で進む授業改善

編集部 小・中・高等学校で系統性のある学びが進んでいるのですね。三重県の英語教育の現状と課題は何ですか。
服部 高等学校では多くの学校でさまざまな授業改善が行われ、その成果が現れています。しかし、「4技能5領域をバランスよく身に付ける」ということにおいては、まだ十分とは言えない現状があります。特に「話す」「書く」の能力を伸ばすため、創意・工夫を凝らした授業展開、パフォーマンステスト等も行っていますが、その実施方法や評価については、その改善に向けて、今後も引き続き、しっかりと取り組んでいべき課題だと考えております。

今田 小学校では来年度から新学習指導要領が全面实施され、高学年で教科

県を挙げて教員の研修機会を設けてきた

化されます。三重県では専科教員による指導を重点的に進めている市町もありますが、基本的には学級担任が指導せざるを得ない状況です。そのためには、小学校教員も英語に関する専門的な知識を高めていく必要がありますし、三重県に限らず、専門性を一層重視した指導体制が必要となるでしょう。そのような状況下で小学校を見てみると、県教育委員会や市町教育委員会が英語教育に関わる研修の場を多く設けており、参加した先生方の英語に対する意識も高まり、着実に力を付けてきていると思います。そのような小学校の変化を受けて、中学校では小中連携や小中一貫教育という市町の取り組みにおいて、小学校に中学校の先生が乗り入れをする形を取っていたり、授業を見に行ったりするなど、小学校の様子を把握することに力を入れています。実際に教室では、子供たちが英語を「聞くこと」や「話すこと」を楽しんでいる様子が見受けられます。今後は、小学校と高等学校のはざまにいる中学校が、小学校の英語教育を受けて、どのようにして高等学校、そして大学へ接続していくのか問われています。

編集部 中学校は教室における生徒の学力差が大きかったり、生徒指導が必要であったり、思春期特有の難しさがあったりと、教科指導は常に生徒指導と裏表にあります。今大会初日の中学校授業

実演を披露する、津市立芸濃中学校の庄山大樹先生がどのような授業を発表されるのか、楽しみです。

今田 私もかつては英語科教員として教壇に立っていましたが、当時は時間を気にしながら「はい、次。はい、次」と生徒を順番に指名して授業を進めていたものです。しかし、生徒たちには、自分の思っていることを伝えたいという気持ちがあるわけですね。庄山先生の授業では、先生が指名するようなことは一切ありません。授業は英語で行われますが、生徒たちも45分間集中して、目的・場面・状況等の設定を大切にした言語活動中心の授業がなされていると感じました。

大会に向けて研修を重ね機運を高めてきた

川合 全英連三重大会に向けて、県内ではこれまでいくつかの研修会を開催してきました。小・中・高等学校、大学等の先生が、校種を超えて熱心に参加されています。全英連三重大会は、県内の教員にとって確かに大きな契機にはなっていますが、あくまで到達点ではなく、1つの発火点になることを期待しています。

服部 2018年12月には、全英連三重大会のスタートアップ研修ということで、大会の記念講演講師や高等学校授業実演の指導助言者である敬愛大学の向後秀明教授を講師にお招きし、小・

中・高等学校合同の研修会を開催しました。また、大会実行委員会の研究発表部は2019年3月に、分科会発表者が進捗状況などを報告し、情報交換をする研修会も設けました。さらに5月には、高英研総会のあとに小・中・高等学校合同の研修会を開催しました。大会当日まで5カ月を切りましたが、授業実演者も分科会発表者も、徐々にステップアップしていけるよう、そして、大会に向けての機運を高めていくことができるような研修を積み重ねています。

川合 スタートアップ研修会では、昨年度の全英連滋賀大会の様子なども報告し、実行委員会のメンバー間でも情報共有を図りました。

服部 全英連三重大会を開催するにあたっては、全英連本部の皆さま、全英連新潟大会、全英連滋賀大会の実行委員長さまをはじめ、たくさんの皆さまに貴重な情報やご助言をいただき今日に至っております。本当にありがたく思っています。大会開催まで時間は限られています。多くの方々の支えに感謝しながら準備を進めているところです。

手探りで実践を重ねてきた小学校から学ぶことは多い

川合 小学校に外国語活動が導入されて以来、小学校の先生方に接する機会が増えてきましたが、総じて、小学校の先生方は、考え方が柔軟でコミュニケーション能力が高いと感じます。小学校の先生方はいろいろな教科を教えなければいけませんし、小学校年齢の子供たちの興味を引きつけ、教材づくりを含めて授業に集中させるために工夫されている姿勢には深く共感します。

今田 小学校で学級担任が英語を教えるなどとは、私の世代の先生方は想像もし得えなかったことですね。全ての教科を学級担任が自カリキュラムを作って授業を行っているため、教科横断的な



三重の実践を明日の授業づくりのヒントに

授業づくりへの対応ができるのだと思います。今後、教科化されても、他の教科とクロスさせながら授業をつくることができるのが、小学校の強みだと思います。今回の大会でも、そうした取り組みもご覧いただけるのではないかと思います。

編集部 小学校の授業実演の指導助言者でもある文部科学省の直山木綿子視学官がよく仰いますが、小学校の先生が素晴らしいのは、自分が受け持っている児童一人一人をよく見取れているので、そのことを踏まえたコミュニケーション活動をきちんと考えられている点だと思います。他教科連携をいかにするか、といった課題もある中・高等学校では、小学校から学ぶことがたくさんありますね。

川合 三重県でもこれまで小学校の外国語活動は、手探りで実践を重ねてきました。しかし、先生方の努力のかいあって、現在では全国的に見ても先進的に取り組むことができていると思います。2019年2月には全国小学校英語教育実践研究会（全小英研）の三重大会が開催され、「新学習指導要領全面实施を見据えた移行期における外国語教育～主体的にコミュニケーションを図ろうとする児童の育成～」をテーマに、県内4つの小学校で授業を公開しました。全国から多くの先生方にご参加いただき、事後研究会でも活発な議論があり、全体会や分科会でも多くの学びがありました。

服部 先日の三小英研の研究会でも、参加者がとてもエネルギーで、会場は「英語教育を小学校からしっかりやっ

ていかなければいけないんだ!」という空気に満ちあふれていました。参加者も多く、素晴らしい研究発表がありました。この熱意と想いを、小・中・高等学校の連携に確実に引き継ぎ、取り組みを進めていくことが大切だと感じました。

大会から得たものを地域に帰って生かしてほしい

編集部 三重大会の見どころは何でしょうか。

川合 小学校での外国語活動、外国語科を通して英語に慣れ親しんできた子供たちが中学校、高等学校へと入ってくるなかで、受け入れる側の学校としては、実際に子供たちがどのような教育を受けてきたのかを知ることが大切になります。昨年度、滋賀大会と一緒に視察した英語科教員が、小学校の授業実演を見て、小学校の外国語活動の成果に驚き、教育の現状を知ることのできる貴重な体験になったと話していました。今回の

大会を通じて、校種を超えた情報共有や連携が、なお一層進んでいけようと思います。

今田 今大会を通じて、校種間の学びの系統性がどのように示されているかをご覧いただくと同時に、そのような学びが今後、各地域でどのように生かされていくのか、さらには10年後にその学びはどのように広がっていくのか…などにも思いを巡らせていただけたらと思います。また、せっかく三重県に来ていただくので、県内の名所や食べ物など、三重県を存分に満喫してってください。世界遺産の熊野古道、伊勢神宮、志摩スペイン村やナガシマスパーランド、鈴鹿サーキットのほか、伊勢志摩には美しい海岸線があります。さらに松阪牛、伊勢海老、焼きはまぐりなどおいしいものもたくさんあります。たくさんある三重の魅力にぜひ触れてってください。

服部 令和元年は「サミット・イヤー」とも言えます。伊勢志摩サミットの際には、世界各国や全国各地から多くの方々に三重に来県していただき、私たちが学ぶ場がたくさんありました。そのような「サミット開催の地」で開かれる全英連三重大会には、多くの先生方にご参加いただき、全国から集う人との交流を通じて、さまざまな気付き・学びを得て、それぞれの地域で生かしていただければと思っています。また、三重県と参加された皆さんの地域の絆がさらに深まり、英語教育の明るい未来に向けて、ともに歩んでいけるよう願っております。



授業実演者インタビュー

全英連大会の見どころの1つは、第1日の授業実演だ。三重大会第1日の授業実演では、新学習指導要領を見据えて、発表者が日頃から小・中・高等学校でどのような授業を行っているのか、その実践を間近に見ることができる。大会を目前に控えた授業実演者たちに、研究テーマと取り組み、当日への意気込みを伺った。

(取材は2019年6月当時)

【大会概要】

第 69 回 全国英語教育研究大会（全英連三重大会）

サミット開催の地 三重から発信！

～校種間の学びの系統性を意識した英語教育～

第1日 11月8日（金）三重県総合文化センター 大ホール
記念講演／敬愛大学 向後 秀明 教授
（元 文部科学省 教科調査官）
授業実演／小学校・中学校・高等学校

第2日 11月9日（土）三重県総合文化センター 各施設
分科会第1部／15分科会
分科会第2部／15分科会

【参加申込について】

参加希望の方は、下記ウェブサイトよりお申し込みください。
申込期間：7月1日（月）～10月11日（金）

全英連三重大会

検索

<https://conv.toptour.co.jp/shop/evt/englishmie2019/>



三重大学教育学部附属小学校 岡井 崇 先生

発表学年：6年生
使用教材：『We Can! 2』（文部科学省新学習指導要領対応小学校外国語教材）
単元名：Unit 6 What do you want to watch?
指導助言者：文部科学省 直山 木綿子 視学官

「主体的にコミュニケーションを図ろうとする授業を目指して」

本校では、全学年とも学級担任主導のもとで外国語活動に取り組み、発音や表現などの面ではALTやJTEのサポートを受けながら授業をしています。授業では導入で行うあいさつや曜日、天気の確認などは毎回、子供たちが主体的に進めています。Small Talkやメインのアクティビティでも、子供たちが自分の思いや考えを友達と伝え合う場面を多く取り入れるよう心掛けています。クラスルーム・イングリッシュは分かりやすい言葉で表現することを意識し、活動に入る前には、教員によるデモンストレーションを見せ、身振り手振りを交えながら、どのような表現を使ってやり取りをするのかを理解できるようにしています。

大会当日は、6年生の授業を発表し、『We Can! 2』Unit 6 のオリンピック・パラリンピックを題材とした単元を扱う予定です。日本でのオリンピック開催を来年に控え、チケットの申し込みや聖火ランナーの募集なども始まり、子供たちの興味や関心が高まってきている今だからこそ、この題材を扱う意味があると考えています。どの競技を見たいかを友達同士で伝え合う活動がメインとなりますが、必ずしも全員がスポーツに興味があるとは限りません。実際に競技を体験したり、県内にいるオリンピックに話を聞いたりするなどして、子供たちの興味の差を埋めながら、題材を自分ごととして捉えられるようにしたいと思います。世界とのつながり、競技とのつながり、人とのつながりにも焦点を当てた授業づくりを考えています。

授業実演の機会をいただいたことで、本校では教員の英語への意識も高まり、授業を公開するなどして、教員同士がお互いに意見を交換できる機会が増えてきました。大会当日に向けて教科横断的に授業を進め、子供たちのモチベーションを高めていきたいと思います。



津市立芸濃中学校 庄山 大樹 先生

発表学年：2年生
使用教材：『NEW HORIZON English Course Book2』（東京書籍）
単元名：Unit 5 Universal Design
指導助言者：名古屋外国語大学 太田 光春 教授（元 文部科学省視学官）

「新学習指導要領をふまえた言語活動の充実を図る取組について」

本校は津市の北西部に位置し、山々に囲まれた自然豊かな土地で、生徒たちが穏やかに過ごしています。地域全体で子供たちを育てていこうと、同じ校区の小学校、中学校、そして幼稚園、保育園の先生方が、年に3回ほど一堂に会する機会を持ち、密に連絡を取り合える環境にあり、幼保小中が連携して教育を行っています。本校では英語科教員3人が協力体制のもと、お互いに定期的に授業の進捗状況を報告したり、意見交換をしたりするなど、チームで英語教育に取り組んでいます。

大会当日は、教科書の「ユニバーサルデザイン」を題材とする単元を扱う予定です。新学習指導要領を見据えて、授業は英語で行うことを基本とします。ただし、生徒たちはまだ中学2年生ですので、自分の考えや気持ちを伝えるには語彙や表現も十分ではないかもしれません。それでも彼らなりに自分の考えを話す姿や、多少分からないことがあっても必死に食らいついてがんばっている姿を見ていただけたら、うれしいです。そして、私自身は生徒たちのそうしたがんばりを褒めることを大切に、生徒の可能性を信じて広げていきたいと思っています。大会当日に向けて、現在はコミュニケーションとしての英語を使うことを意識し、実際のやり取りを通じて文法項目などを確認できるように、Small Talkなどの場面で繰り返し使いながら理解させ、定着を図っています。

中学校は小学校から高等学校への橋渡しとしての役割を担っています。小学校の先生方が丁寧に指導され、培われたコミュニケーションの素地を生かして、1人でも多くの生徒たちが、高等学校や次のステージに進んだときに、英語に自信を持って歩み出していくことができるような指導のできる中学校教員でありたいと、日々、研鑽に励んでいます。



三重県立津高等学校 伊藤 毅 先生

発表学年：3年生
使用教材：『POLESTAR English Communication Ⅲ』（数研出版）
単元名：Lesson 6 How to Make Japan “Cool”
Lesson 9 World Heritage Sites: Not Always a Good Idea?
指導助言者：敬愛大学 向後 秀明 教授（元 文部科学省教科調査官）

「思考力・発信力の向上につながる知的な授業のあり方」

創立140年を迎える本校は三重県内でも最も長い歴史のある高等学校であり、生徒数の多い大規模校でもあります。過去の全英連大会の高等学校授業実演では2年生が登壇することが多かったと思いますが、今大会では大学受験を間近に控える3年生が、「高校3年間の学びを経て、どのようなことができるようになっていくのか」を見ていただけたらと考えています。

大会当日は、それまでに教科書で扱ってきた「今治のタオルメーカーによる最高品質のタオル生産」や「世界文化遺産に登録された中国の麗江古城にもたらされた利益と課題」なども題材に、生徒たちの地元である三重県の経済状況や抱えている課題と関連づけて学ぶ予定です。教科書はあくまで題材であり、生徒たちはその題材をもとに自分たちで調べ、考え、ディスカッションをするという生徒主体の言語活動を行います。これまで、1つのテーマに基づいて、教科書などを通じて触れるさまざまな題材、社会的課題を自分ごととして捉えて考え、生徒同士で議論し合うという「思考力・発信力を養う知的な授業づくり」を大切にしてきました。

大会に向けて、昨年より数度にわたり、敬愛大学の向後秀明先生に指導助言をいただいています。また、校内の英語科教員9人をはじめ、管理職の先生方からも一語教師としてのアドバイスをいただき、より良い授業をつくろうと学校全体で授業改善に取り組むなど、全英連三重大会を契機に教育体制が変わってきました。授業ではできる限り、生徒同士の発話の機会を増やせるように努めていますが、生徒たちも英語で話せるようになってきた喜びを実感しているようです。生徒たちには「英語」という言葉そのものに興味を持ち、英語を通して得られる知識や情報、視野の広がりを楽しんでほしいと願っています。



2017年度 第67回全英連新潟大会 高等学校授業実演より

【連載】教員の自主研修 第1回 新潟県編

全英連新潟大会から広がった 自主研修の輪

新潟県高等学校教育研究会英語部長 萩野 俊哉 先生（県立加茂高等学校長）

県立新潟高等学校 荒木 美恵子 先生

県立新潟中央高等学校 高橋 有香 先生

県立加茂農林高等学校 長谷川 誠 先生

新潟経営大学 経営情報学部 准教授 阿部 雅也 先生

新潟県の教員たちは2017年の全英連新潟大会の開催を契機に、自らプロジェクトチームを立ち上げ、「プロジェクトS (Smile)」「プロジェクトO (Open Class)」「プロジェクトE (Evaluation)」に分かれて活動し、各自の実践や課題を話し合い、交流を深めてきた。

そして、新潟県高等学校教育研究会（高教研）英語部会は、事業活動の一環として、教員によるそれらの自主研修をサポートしてきた。

プロジェクトの活動をリードしてきた先生方に、立ち上げの経緯や目的、これまでの取り組み、今後の展望についてお話をいただいた。

きっかけは全英連大分大会だった

新潟県で教員が自主研修活動を始めたきっかけは2015年に開催された全英連大分大会で、新潟県では2年後に全英連大会開催を控えていた。荒木美恵子先生は、当時の新潟県立教育センター指導主事だった阿部雅也先生らと大分大会に参加した。その際、大分県の教員たちが全英連大会に向けて積極的に研修を重ね、お互いを高め合ってきた姿に感銘を受けたという。そして、「全英連新潟大会を一過性のイベントで終わらせるのではなく、教員たちが協力し合い、継続的に教育をより良いものにしていける機会として生かしたい」との思いが強まり、2016年に自主研修活動「プロジェクト・スマイル」を立ち上げた。

先生や生徒のスマイルを広げたい

荒木先生は、「私は教員になった頃から自主研修の場に参加していました。その1つは『コミュニケーショング研究会』です。月に1回、日曜日に参加し、他校の先生方から叱咤激励していただき、翌日からまたがんばって教壇に立とうという気持ちになりました。先生方の励ましがなければ、私は教員を続けていけなかったと思います」と振り返る。悩みを聞いてもらったり、励ましてもらったりすることで、仲間や先輩の存在の大

きさを実感し、自分もほかの先生方の手助けになれば、と考えるようになったという。そこで、「自分の状況に根差して悩みを解決する手助けをすれば先生の“スマイル”が増える。そして、生徒が授業での学びを楽しみ、ほかの生徒との交流から“スマイル”が広がる。そうした先生や生徒のスマイルを広げることをみんなで行いたいと思ったのです」と、プロジェクト立ち上げに至った思いを語る。

阿部先生は当時、指導主事として、荒木先生らと一緒に草の根的な活動も行ってきたが、「先生同士のつながりをさらに広げれば、自分がこれまで行ってきた研修の何倍もの成果上がるのではないか」と感じていた。また、指導主事として県内各校を回り、先生方の授業づくりへの熱い想いやそれに伴う悩みに向き合うなかで、「英語教員にとって変化を求められる厳しい時代だが、先生方には情報交換をしてお互いに高め合おうという気持ちがもともとある。場所や時間など、機会の設定を手伝うことで、おのずとシナジーが生まれるはずだ」と信じていた。そのような思いから、県内の教員をつなぐ授業改善プロジェクトがスタートした。

高教研英語部会が活動を後押し

そうして「プロジェクト・スマイル」の活動が始まると、当時、県立佐渡高等学校に勤務していた長谷川誠先生は、「授業改善に取り組むための情報がほしい、仲間づくりをしたい」と参加した。「佐渡という離島では、得られる情報量が少なく、島外に出て活動に参加することで、ほかの先生方から大いに刺激を受けました」と話す。そして、研修内容に大変満足したことから、自ら研修報告書を作って同じく佐渡島内にある県立佐渡中等教育学校の先生方にもシェアしたり、県外の先生にまで研修内容を送ったりするなど取り組みを県内外へと広げていった。

また、県内の大規模校で教える高橋有香先生も、当時は授業改善に対する悩みや、校内の英語科教員同士での情報共有がうまくできずにいたという。「自分が何に悩んでいるのかさえも分からないほど多忙を極めていましたが、プロジェクトに参加して周りの人の悩みを聞いていくうちに、実はそれは自分の悩みでもあるのだと共感できました」と話す。プロジェクトに参加したことで、人とのつながりの大切さを実感した。そして「この輪を広げていきたい」と、校内でも英語科の先生方とお茶を飲みながら話す「ほっとカフェ」という場をつくり、校内全体で授業改善に取り組んでいこうとする意識を高めていった。

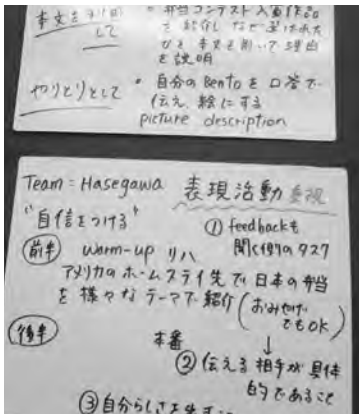
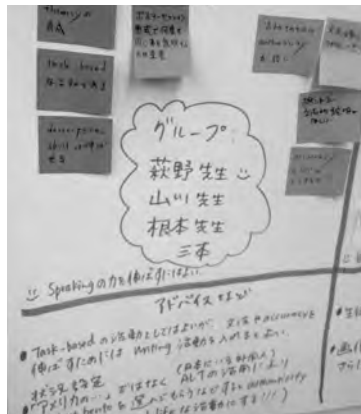
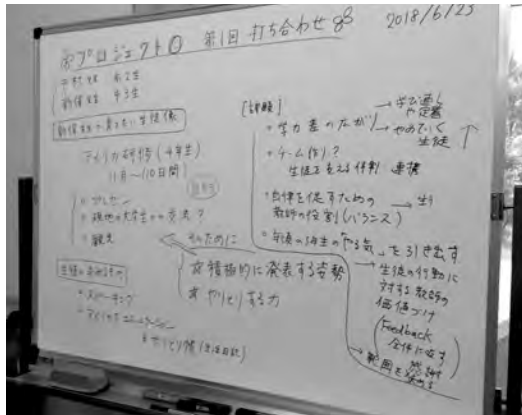
高教研英語部長を務める萩野俊哉先生によれば、「県内では過去にも教員の自主研修会や研究会が存在した経緯はあるが、そうしたなか、『プロジェクト・スマイル』は新しい個性を自らつくり出そうとする新しい息吹を持った自主研修会だ」と、後輩教員たちが起こしたムーブメントを喜ばしく思った。そして、部長名で県内各校の校長先生に宛てて、教員のプロジェクト参加を促す文書を送るなどして、プロジェクト参加者が活動しやすいような環境をつくり、バックアップしてきた。



県立新潟高等学校
荒木 美恵子 先生



新潟経営大学
経営情報学部 准教授
阿部 雅也 先生



仲間がいれば、道が拓ける

「プロジェクト・スマイル」が立ち上がった翌年の2017年には、高橋先生を中心に授業改善に向けた授業実践や情報共有をメインテーマとする「プロジェクトO (Open Class)」が、また長谷川先生を中心とする評価についての研修を行う「プロジェクトE (Evaluation)」が活動をスタートさせた。そして現在では、これら3つのプロジェクトに高校教員を中心に80名ほどの教員が所属しており、活動は参加する教員それぞれのニーズに沿って、フレキシブルに行われている。「仲間と活動したら楽しい。『ゆるく、長く、楽しく』が活動のモットーです」。荒木先生は、そのように表現する。そして、「忙しくて出られない時期もある。出られる時になったら、参加できる。出れば、仲間が待っている。仲間と話す、また道が拓けてくる。そのような会でありたい」と述べた。

3つのプロジェクトで仲間と活動

「プロジェクトS (Smile)」は、先生の日頃の授業の悩みや実践について、お互い話し合い、手助けし合う研修会だ。そのコンセプトは、人とのつながりややり取りのなかで、「先生と生徒の笑顔を増やす」ことにある。3つのプロジェクトのなかで最も規模が大きく、学期末に1回開催する大研修会と、月1回開催する小研修会の2つの研修形態から成る。大研修会では、教員自身が生徒の立場になってスピーキングや表現活動を行ったり、話をじっくりと聞き合う活動を行ったり、講師を招いて講演を行ったりするなどの活動が行われる。また小研修会では、3〜4人一組のグループごとに1年間継続して活動を行う。グループのリーダーは、メンバーの予定に合わせて活動時間と場所を設定し、メ

ンバーたちは学校やカフェ、公民館などを利用して、リラックスした雰囲気のなかでお互いの実践や悩みを話し合う。そして毎回、会の終わりに「次回までの行動目標を各自が宣言する」ことをルールにしている。「自分1人では一步を踏み出せなくても、それはとても良い内容だから実践した方がいいよ、と背中を押してもらったり、それにはこうしたら?と具体的なアドバイスをもらったり、ということがたくさんあります」と荒木先生は話す。現在8つのグループに分かれて活動を行っており、各グループのリーダーは研修会の内容をまとめて、プロジェクトSに参加するメンバー全員にメーリングリストで配信し、お互いのグループで情報を共有できるようなシステムとなっている。

「プロジェクトO」では、公開授業を行う先生の授業研究や授業後の検討会



プロジェクトS (Smile) リーダー
荒木 美恵子 先生

プロジェクト S (Smile)

授業を改善し、先生方の笑顔と生徒たちの笑顔が増えることを目指す。参加者が日頃の授業の悩みや実践について話し、聞き、相談し、次の行動へつなげていく。学期末ごとに開催する大グループ研修会 (3プロジェクト合同) と、3〜4人一組の小グループで毎月継続的に活動する小グループ研修会のほか、ゲスト講師を迎えて行う特別研修会を行っている。



プロジェクトO (Open Class) リーダー
高橋 有香 先生

プロジェクト O (Open Class)

先生一人一人が主人公となり、協働のかつ継続的に研修に取り組む。毎年秋に開催する全県研究協議会で公開授業を行う先生が「目指す生徒の姿」と課題を共有し、授業体験をしながら指導案の検討とアイデアの共有を通じて、自身の授業改善へのヒントを得る。月に1回程度の定例会と外部講師を招いて行う研修会などを行っている。

と、長谷川先生は考える。そして、「より良い評価のあり方を研究すれば、授業改善にもつながるはずです」と述べ、自身も到達目標と指導、評価を一体化した実践に取り組んでいるという。

悩みや不安を話し合い、 授業づくりを模索する場

参加する先生方からは、学校現場での課題の声も聞こえてくる。

荒木先生は、「授業にどのような言語活動を入れ、どのように進めていったらよいか、自身が授業に取り入れている言語活動が、英語科のほかの先生方とともに進んでいけるものか、新学年を立ち上げる時にどのように目標や指導方針の共有を図っていけばいいのかなど、授業づくりに関する共通する悩みを皆が抱えています」と話す。高橋先生は、「自主研修ではより良い実践について話し合えたとしても、それを実際の授業ではなかなか実践できず、授業のなかで目の前の生徒にどうアレンジするかという課題があります」と指摘する。また、



プロジェクトE (Evaluation) リーダー
長谷川 誠 先生

プロジェクト E (Evaluation)

評価に関する悩み相談や実践紹介などから参加者がヒントを得て、実践力の向上を目指す。年2回の全体研修では、各学期で各自が行った実践を振り返り、より良い評価のあり方について話し合う。小グループでの活動では悩みや実践例を持ち寄って話し合う。新学習指導要領における評価や、大学入試問題の研究にも取り組んでいる。

長谷川先生によれば、言語活動に熱心に取り組む生徒を評価したくても、評価の割合がパフォーマンステストより定期考査に比重が置かれている学校も多く、その割合についての悩みがよく聞かれるという。阿部先生は「評価について学年チームで話し合うことは、連携を始めるチャンスとなります。評価というと厳密さに目が向きがちですが、教員間で季節ごとにクリアさせたいパフォーマンスの具体像を動画的に描くことができているかが大切です」と指摘した。

それぞれのプロジェクトでは、実践を進めてきた教員たちだからこそぶつかる壁や悩みが見受けられる。萩野先生は、「3つのプロジェクトは先生方にとって、駆け込み寺だとも言えます。救いを求めていけば、必ず得られるものがあるはずです。プロジェクトの参加者には受け身の人は誰もいません。勇気を持って口を開けば、みんなが悩みを聞いてくれるのです」と、プロジェクトが県内の教員にとって、よりどころになっていると述べた。

さらに活動を活性化するために

3つのプロジェクトが立ち上がってから2年が経ち、活動を続けるうえでの目標と課題も見えてきた。萩野先生は、最近では参加するメンバーが固定化され、活動が膠着化しているのではないかと指摘する。だからこそ回を重ねるごとに、「参加者のカラーが出てくることは魅力でもあるが、それが新たに参加したい教員にとってはハードルにも感じかねない。そこに着目して、さらに裾野を広げて発信していけたら」と話す。

新学習指導要領への移行に伴い、「新しい評価の観点、例えば、学びに向かう力や人間性、やり取りの部分をどのように評価するのかは、どの学校でも共通の課題となるはずです」と話す長谷川先生。「今後プロジェクトEでは新しい評価について相談し合い、フィードバックを得られるような研修へと発展させていきたい」と展望を述べた。長谷川先生が現在勤務している県立加茂農林高等学校英語科では科目リーダー制を取っており、科目担当者全員で指導目標、評価の方法、指導計画等をシェアしたり、お互い気付いたことを話し合ったりしている。「今後も校内での実践とプロジェクトの

研修内容の両方を高めて、プロジェクトEの活性化にもつなげていきたい」と考えている。

阿部先生は「今後、新しい評価で求められるのは『生徒がこのようなことができたらい』というパフォーマンス像を段階的に描くこと。教科書単元からどのようなパフォーマンスを引き出して評価していくか、素材と評価をつなぐひらめき力や年間のデザイン力が求められます」と述べる。また、今後のプロジェクトEのあり方については「この素材からどのようなパフォーマンスを導きますか?という問いから始まり、ルーブリック等を使った評価方法を皆で練り上げ、『素材+パフォーマンス+評価』のパッケージを蓄積していくこと。また、このような教員同士が相談し合う文化を長谷川先生のように学校へ持ち帰ることで、学校独自のCAN-DOリストが、更新する段階で生かされることになります。カリキュラムマネジメントの突破口を開くのは英語科なのです」と、校内研修の活性化も願う。

プロジェクトOでは、「今までは若い先生を育成するという側面が強かったのですが、活動のバリエーションをさらに増やし、授業で実践できる具体にも踏み込みながらやっていきたい」と高橋先生は話す。講演やワークショップなども取り入れながら、さらに活動の頻度を増やす予定だ。

新潟から全国へ、小中高大でつながる研修を

現在、県内では高等学校だけでなく、大学でも教員同士でチームやグループをつかって活動しようとする動きもある。阿部先生は「私の問題意識の1つに、大学の授業改革があります。現在、学内でも教員のチームをつかって情報を共有し、授業を変えていこうと取り組んでいる真っ最中です」と話す。学生には高校

生のプレゼンテーションを見せて、高校生と一緒にプレゼンテーションの内容を作り上げていくなど、高大接続を意識した授業づくりを模索しているという。

また、新学習指導要領における小学校の英語必修化に伴い、小学校教員の研修へのニーズが高まっており、「小学校教員の学び合いの枠組み、教員同士の学びの場をつくっていき」と阿部先生は考える。そして、「小中高大の一貫した学び合いへとつながっていったとき、CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）に基づくCAN-DOリストのようなパフォーマンス像ができて上がるのではないかと語る。

今後は、高等学校の先生が小学校の授業を参観しに行ったり、小・中・高等学校の教員同士がともに学び合う場を持つことができたりと、活動の輪が広がっていくことも考えられる。阿部先生は「このプロジェクトでの最大の発見は、先生方は校種を問わず『子供が好き』という、自身が教員を目指した原点でつながっているということ。小・中・高・大の学びをつくる大人が『学び』をテーマに学び合うことで、学びの楽しさが子供たちにも伝わり、それが生涯にわたり学び続ける『自律的学習者』を育てる教育へのムーブメントの一端になり得るとさえ感じています」と話す。

誰もが同じ一英語科教員として、年齢も立場も関係なく、フラットな関係で参加できる。自分の都合に応じてできる範囲で参加し、誰もががんばりすぎない。同じ思いを持った人たちが集まり、お互いに刺激し合える。時には経験の浅い先生の一言で、眼が開かれることもある。萩野先生は、「このプロジェクトにはそのような良さが詰まっています。従来にはなかった大きな特長ではないでしょうか」と、改めてプロジェクトの魅力を強調する。そして、「先生方の足元から始まるこの研修をモデルにし、新潟県だけでなく、ぜひ他県にも広げていただき、県をまたいで教員同士の交流を深め、日本の英語教育の改善につなげていけたら」と力強く語った。

News & Topics

公益財団法人 日本英語検定協会からのお知らせ

お知らせ

『英語情報』追加ご希望の方へ

『英語情報』は、各校に1冊お届けしております。追加分をご希望の方は、お手数ですが、250円切手を貼り、住所・氏名をご記入のうえ、定形外封筒を下記までお送りください。封筒を受領後、約10日で追加1冊分を発送いたします。

※お送りできるのは、2019年度以降発行分となります。在庫には限りがございます。在庫がない場合は、英検協会ウェブサイトに掲載いたします。必ずウェブサイトにて在庫の有無をご確認ください。在庫がないことをお知らせした日付以降の消印でご希望いただいた場合には、追加送付ができませんのでご了承ください。複数冊をご希望の場合は、ご希望の冊数が入る封筒に送料分の切手を貼り付けて、下記までお送りください。

追加送付用封筒の郵送先

〒162-8055 東京都新宿区横寺町55 公益財団法人 日本英語検定協会 CS部 CS企画課 『英語情報』係



講師派遣

「英検講師派遣」をご活用ください

英検協会では、1988年より「英検講師派遣事業」を行っています。この事業は、全国各都道府県の教育委員会や、中学校英語教育研究会（中英研）および高等学校英語教育研究会（高英研）が開催するセミナー等にて、ご希望の講演テーマ・目的にふさわしい講師をご紹介します。セミナー当日にご講演いただくものです。2019年度は下記の日程にて、お申し込みを受け付けております。

※ご利用には条件がございます。

<2019年度 申込受付期間>

毎年、上半期（4月～9月）と下半期（10月～3月）の2期に分けて設定しています。2019年度の申込受付期間は次の通りです。

セミナー開催時期	受付締切
2019年4月1日（月）～2019年9月30日（月）	2019年2月28日（木）
2019年10月1日（火）～2020年3月31日（火）	2019年7月17日（水）

「英検講師派遣」をご検討されている場合、まずは下記までお問い合わせください。受付締切日を過ぎていても、ご希望の講演内容や対象者、講演会の種類・規模等によっては、受け付けさせていただく場合がございます。

【お問い合わせ】 公益財団法人 日本英語検定協会 講師派遣事業 事務局

TEL：0800-200-6722（平日9:30～17:00） E-mail：midas-koushi-haken@eiken.or.jp

セミナー

「英語教育セミナー in 東京2019」を12月に開催します

英検協会では、毎年、小学校・中学校・高等学校の教員および教育委員会向けの英語教育セミナーを開催しています。2019年12月26日には「英語教育セミナー in 東京2019」を東京都内に開催する予定です。参加申込方法や詳細は、11月頃に英検協会ウェブサイトよりご案内いたします。多くの皆さまのご参加を心よりお待ちしております。



<開催概要>

日時：2019年12月26日（木） 10:20～17:10（予定）

会場：東京都内の施設を予定

参加費：無料

定員：300名（予定）

実用英語技能検定受験時に必要な書類について（2019年度第1回から変更）

2019年度第1回検定一次試験より、本人確認強化のため、

1～3級で持参書類を全て忘れた受験者は受験をお断りさせていただきます。

なお、**4・5級**で持参書類を忘れた場合は、必ず受付に申し出てください。

検定当日は、下記の持参書類を確認のうえ、必ずお持ちいただくようお願いいたします。

※スマートフォンの画面等で持参書類を提示された場合も、「持参書類忘れ」とみなしますので、ご注意ください。

一次試験（本会場）

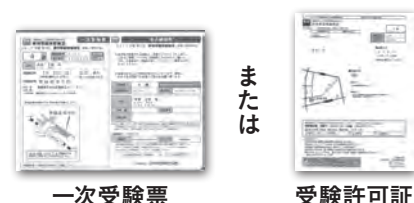
1～3級 持参書類



一次受験票兼本人確認票*

※未着や紛失によりお手元がない場合は、「受験許可証」を必ず持参してください。

4・5級 持参書類



一次受験票

受験許可証

4・5級で持参書類を全て忘れた場合は、必ず受付に申し出てください。

二次試験

※受験票が未着や紛失によりお手元がない場合は、「受験許可証」を必ず持参してください。

一次試験を本会場で受験



本人確認票

（写真あり・協会印押印済）

※協会印がない場合は身分証明書を持参してください。

※一次試験を本会場で受験した受験者で、持参書類を全て忘れた場合でも、身分証明書を持参している場合は受験可能です。

二次受験票

一次試験を準会場で受験 （一次試験免除者を含む）



二次受験票

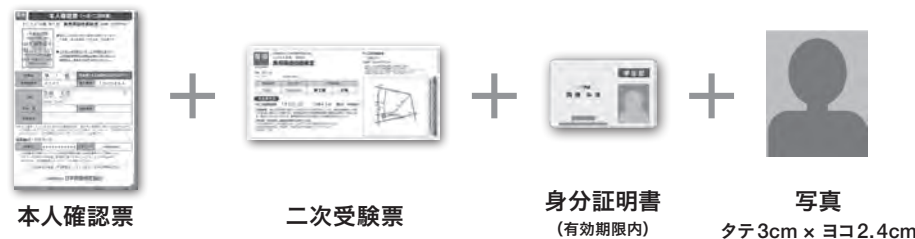
身分証明書

（有効期限内）

写真

タテ3cm x ヨコ2.4cm

個人申込・団体本会場申込の一次試験免除者



本人確認票

二次受験票

身分証明書

（有効期限内）

写真

タテ3cm x ヨコ2.4cm

身分証明書として
認められているもの



・運転免許証 ・パスポート ・健康保険証（コピー可）
・社員証 ・学生証 ・生徒手帳（写真なし可）
・マイナンバーカード 等



・名刺・会員カード類
・定期券
・有効期限外の身分証明書

教員専用「特別検定料制度」をご活用ください

中学校・高等学校の英語科教員の皆さまへ 中学校・高校教員専用「特別検定料制度」のご案内

英検協会は、文部科学省の「英語力向上のための5つの提言」を受けた取り組みを全面的に支援し、中学校・高等学校の英語科教員を対象として、英検を教員特別検定料にてご提供しています。

◆助成の対象者

学校教育法第1条に規定された学校のうち、中学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校、高等専門学校に勤務する英語科教員の方。

※海外勤務の方はご利用いただけません。

※常勤に限るものとします。

※勤務校が英検の団体登録をしていることが必要です。

◆助成の対象となる級および教員特別検定料

対象級	特別検定料（税込）	定価（税込）
1級	7,100 円	9,500 円
準1級	3,800 円	7,600 円
2級	3,200 円	6,500 円
準2級	4,400 円	5,900 円
3級	3,700 円	4,900 円
4級	2,700 円	3,600 円
5級	2,200 円	3,000 円

※通常の受験と同様、合格級の資格取得を認定します。

◆お申し込みについて

1. 英検ウェブサイトの専用ページよりお申し込みください。
2. お手元に届いた「簡易書留はがき」に記載の「英検団体番号」「教員助成パスコード」を入力してください。
3. ご入力いただいたご住所に受験票～可否結果をお送りします。

※当制度で指定された申込方法以外でのお申し込みは、助成制度の適用対象外となります。

※一次試験、二次試験ともに国内の公開会場での受験となります。

※お申し込みは個人扱いとなり、勤務校へ申込内容や試験結果を集計した資料をお送りすることはありません。

※英語科教員の方には、調査研究および統計資料作成を目的として、お申し込みの際に実施するアンケート調査などにご協力いただきます。

小学校教員の皆さまへ 小学校教員専用「特別検定料制度」のご案内

英検協会は、文部科学省の「グローバル化に対応した英語教育実施計画」に基づき、その施策に協力する形で、小学校教員を対象として、英検を教員特別検定料にてご提供しています。

◆助成の対象者

学校教育法第1条に規定された学校のうち、日本国内の小学校に勤務する教員の方。

※外部講師、海外校に勤務されている方はご利用いただけません。

※常勤に限るものとします。

◆助成の対象となる級および教員特別検定料

対象級	特別検定料（税込）	定価（税込）
1級	7,100 円	9,500 円
準1級	3,800 円	7,600 円
2級	3,200 円	6,500 円
準2級	4,400 円	5,900 円
3級	3,700 円	4,900 円
4級	2,700 円	3,600 円
5級	2,200 円	3,000 円

※通常の受験と同様、合格級の資格取得を認定します。

◆お申し込みについて

- ・必要事項を明記した「願書」
- ・「小学校教員対象 英検検定料助成申請書」
- ・郵便為替に換えた「検定料」

の3点を同封のうえ、簡易書留にて、各検定の申込期間内に下記までお送りください。

〒162-8055 東京都新宿区横寺町55
公益財団法人 日本英語検定協会
英検サービスセンター 小学校教員検定料助成 係

※お申し込み期間の協会必着日の厳守をお願いいたします。

※当制度で指定された申込方法以外でのお申し込みは、助成制度の適用対象外となります。

※一次試験、二次試験ともに国内の公開会場での受験となります。

※当制度を利用して受験される場合、申込内容・受験結果を個人が特定されない形で調査研究資料および統計資料として国・都道府県・市区町村または一般に対して公開します。

教員専用「特別検定料制度」に関するお問い合わせ

公益財団法人 日本英語検定協会 英検サービスセンター
TEL：03-3266-6581 ※9:30～17:00（土日・祝日を除く）

英検® 試験問題と解答の
ウェブサイト公開のご案内

公益財団法人 日本英語検定協会は、より広範な情報公開と、サービスの質的向上を図るべく、一次試験問題を英検ウェブサイトにて公開するサービスを行っております。**一次試験日から約1週間後に問題を提供いたします。**英検ウェブサイトのURLは、下記の通りです。



英検試験問題
https://www.eiken.or.jp/eiken/exam/

一次試験の「解答速報」は、毎回一次試験日の翌月曜日13時以降に英検ウェブサイトにて公開いたします。



英検解答速報
https://www.eiken.or.jp/eiken/result/

本誌について

お問い合わせ先

英検サービスセンター TEL 03-3266-8311

本誌は以下、英検ウェブサイトよりPDFにてダウンロードしていただくことが可能です。



『英語情報』掲載URL
https://www.eiken.or.jp/eiken/group/

お問い合わせ電話案内

電話番号はお間違えのないようお願いいたします。

英検申込受付に関すること（出願、検定料など）	英検サービスセンター	（個人）03-3266-8311 （団体）03-3266-6581
英検受験に関すること（受験票、会場、合格通知など）		
英検 Jr. に関すること	英検サービスセンター	（英検 Jr.）03-3266-6463
BULATS・GCASに関すること	BULATS・GCAS 事務局	03-3266-6366
IELTSに関すること	IELTS 事務局	03-3266-6852
TEAPに関すること	TEAP 運営事務局	03-3266-6556
英検留学に関すること	英検留学情報センター	03-3266-6839
通信講座に関すること	通信教育課	03-3266-6521
その他のお問い合わせ	英検サービスセンター	03-3266-8311

※全国の英語教育に関する研究会、セミナーなどのウェブへの情報掲載については、英検のウェブサイトのフォームよりお申し込みください。

編集後記

新しい時代「令和」が始まりました。新学習指導要領や大学入学共通テストの実施を来年に控え、いよいよ具体的な情報も発表され始めています。社会の変化とともに英語教育に求められる内容が大きく変化してきている実態を踏まえ、『英語情報』も今年度はリニューアルを予定しており、まずは「創刊準備号」をお届けいたしました。

今号では、「平成から令和へ」と題して、日本の英語教育の変遷やこれから求められる授業のあり方について改めて理解を深めるための特集を組みました。また、11月8日、9日に開催される「第69回全国英語教育研究大会（全英連三重大会）」についても、実行委員会メンバーや授業実演者の大会へ向けた意気込みや大会の見どころなどをご紹介しています。

『英語情報』はこれからも、全国の小・中・高等学校の先生方や教育委員会、教育センターの皆さまに寄り添い、授業改善に役立つ情報提供をしてまいります。皆さまからのご意見・ご要望をぜひ編集部へお寄せください。

『英語情報』編集部一同

英語情報 創刊準備号

2019年7月15日発行

発行 公益財団法人 日本英語検定協会
CS部 CS企画課
〒162- 8055
東京都新宿区横寺町55

編集長 小野島 恵次（JEEN）

編集・デザイン 株式会社モアカラー

制作 株式会社マイダスコミュニケーション

印刷・製本 佐伯印刷株式会社

©無断転載、複製を禁じます。

©2019 公益財団法人 日本英語検定協会

大学入試で高い採用率を占める

実用英語技能検定（従来型）、TEAP、TEAP CBT

2019年度外部検定を利用した入試の中で、実用英語技能検定（英検®）の採用率は、推薦・AO入試、一般入試でそれぞれ90%※を超え、TEAPの一般入試での採用率は80%※を超えています。また、「受験生が大学入試で利用しようとしている英語外部資格・検定試験」に関する調査※では、英検が高い比率を占め、TEAPが続いています。

※旺文社教育情報センター調べ（採用率は学科単位で集計・算出）



年間試験日程



2019年度 実用英語技能検定（従来型）試験日程

	受付期間	一次試験	二次試験
第1回検定	3月15日（金）～ 5月9日（木） 書店受付締切日：4月26日（金）	本会場：6月2日（日） 準会場（すべての団体）：6月1日（土）、2日（日） 準会場（中学・高校のみ）：5月31日（金）	A日程：6月30日（日）
			B日程：7月7日（日）
第2回検定	8月1日（木）～ 9月12日（木） 書店受付締切日：9月6日（金）	本会場：10月6日（日） 準会場（すべての団体）：10月5日（土）、6日（日） 準会場（中学・高校のみ）：10月4日（金）	A日程：11月3日（日）
			B日程：11月10日（日）
第3回検定	11月22日（金）～12月12日（木） 書店受付締切日：12月6日（金）	本会場：2020年1月26日（日） 準会場（すべての団体）：2020年1月25日（土）、26日（日） 準会場（中学・高校のみ）：2020年1月24日（金）	A日程：2020年2月23日（日）
			B日程：2020年3月1日（日）



2019年度 TEAP 試験日程

	試験日	申込期間
第1回	7月21日（日）	5月13日（月）～ 6月16日（日） コンビニ・郵便局 ATM
		5月13日（月）～ 6月27日（木）16時 クレジットカード
第2回	9月15日（日）	7月 8日（月）～ 8月 4日（日） コンビニ・郵便局 ATM
		7月 8日（月）～ 8月15日（木）16時 クレジットカード
第3回	11月17日（日）	9月 9日（月）～ 10月13日（日） コンビニ・郵便局 ATM
		9月 9日（月）～ 10月24日（木）16時 クレジットカード



2019年度 TEAP CBT 試験日程

	試験日	申込期間
第1回	6月16日（日）	4月15日（月）～ 5月16日（木） コンビニ・郵便局 ATM
		4月15日（月）～ 5月23日（木）16時 クレジットカード
第2回	8月11日（日）	6月 3日（月）～ 7月11日（木） コンビニ・郵便局 ATM
		6月 3日（月）～ 7月18日（木）16時 クレジットカード
第3回	10月20日（日）	8月19日（月）～ 9月19日（木） コンビニ・郵便局 ATM
		8月19日（月）～ 9月26日（木）16時 クレジットカード

